
デジモンフューチャー

あにい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモンフューチャー

【Nコード】

N2022G

【作者名】

あにい

【あらすじ】

とある世界。この世界ではあるゲームが人気になっていた。しかし、そのゲームが大変な事態を引き起こしてしまう・・・

キャラ紹介

タチバナハヤト

● 橘隼人

この物語の主人公

中学一年生

父親や兄と共に新作デジモンゲーム作成に関わっていたが、突如ゲーム世界の情報を取り込んだデジタルワールドにやってきてしまう

運動神経はかなり良い

○ ミルモン

成長期のデジモン

大きさは頭に乘せられるくらい

デジタルワールドにやってきた隼人のパートナーとなる本来どのデジモンももっている属性を持たないデジモンちなみにミルモンは隼人がデザインしたデジモンである性別は一応女の子である

タチバナリク

● 橘陸

隼人の兄で19歳

高校卒業してからは、父親達の手伝いをやっている

隼人には優しい

デジタルワールドへ行ってしまった隼人をもとても心配している

タチバナミツオ

● 橘光雄

隼人と陸の父親

ゲーム作成等の仕事をしている

その中で息子達の協力を得て、新たなデジモンのゲームを作ったが結果隼人をその世界に引きずり込ませてしまう

隼人や他の子供達を帰還させるべく、行動する

● 柊刹那 ヒイラギセツナ

隼人同様に、デジタルワールドに飛ばされた中学二年の男子
双子の妹・未来と一緒に最初は行動していたが後に単独で行動する
性格は感情に流されない
一人でいることを好むようである

● チクモン

身体をトゲで覆っている成長期のデジモン
そのトゲは攻撃だけではなく、防御にも有効である
ウィルス種である

○ 柊未来 ヒイラギミライ

隼人同様にデジタルワールドにやってきた中学二年の女の子
刹那とは双子の関係だが、性格は反対で誰にでも優しい
一人でデジタルワールドから出る方法を探している刹那とは違い、
仲間と共に行動することを決めた

○ ピュアモン

未来のパートナーデジモン
純粋な心を持ち、相手の心を善悪で感じ取れる
隼人にも結構なついている
ミルモンとも仲良しである
ワクチン種。

● ニードラモン

チクモンから進化した成熟期のデジモン
翼も生え空中でも戦えるようになった
必殺技は針を雨のように降り注がせる【ニードスコール】と

翼で身体を包み針を逆立たせて流星のように相手に突撃する【ニードリングスターズ】である

●メタルデビモン

デビモンが鋼鉄武装した成熟期のデジモン

デビモン系デジモンで成熟期の中でも高ランクのデジモンだが、刹那のチクモンから進化したニードラモンによって倒されたウイルス種である

●スコルピモン

蠍のようなデジモンで成熟期

デジタルワールドでレアな存在である人間を捕まえようとして隼人たちの前に現れる

部下にモグモンがいる。

必殺技は受けた相手を痺れさせる【ポイズニーニードル】と尻尾を相手に叩きつける【テイルブレイカー】である

●モグモン

モグラのような成長期のデジモン。

スコルピモンの指示を受けて隼人たちと接触した常に何匹か集まって行動している

○ミラスモン

ミルモンが進化したデータ種の成熟期のデジモン

クリスタルのような輝きを放ち、両腕に盾のようなものを装備している。

必殺技はその盾を一つにあわせて大きな鏡の幕を発生させ相手の攻撃を跳ね返す【ミラースマジック】

クロスさせた両腕から放たれる鋭い十字のエネルギー斬【ミラージュクロスラッシュ】である

ファイル1：隼人とデジモン

ここはとある街にあるとあるビル。

その一室に広い事務所のような部屋があった。

ここでは今新たなゲームの開発が行われていた。

と、奥で作業をしている人物の元に駆け寄る一人の男の子。

「父さん、新しいデジモンのイラスト描いたよ」

父親である光雄にイラストを渡す息子の隼人。

「相変わらず絵を描くのは俺より上手いよな、隼人」

そう言ったのは隼人の兄である陸だった。

「これしか父さんや兄さんの手伝いとかできないから」

そう言う隼人。

と、イラストを受け取った光雄は時計を見た。

「もうこんな時間か・・・隼人も陸も先に帰っていてくれ・・・調整を終えたら私も帰るよ」

そう告げた光雄。

「わかったそれじゃ行こう隼人」

そんな訳で隼人と陸はビルの近くにある自宅へと帰っていった。

だがこの時誰も、あんな不思議な出来事が起きるなどとは予想していなかったのであった。

そして、その日の夜。

自室でゆっくりしていた隼人と陸。

「何だ隼人、またデジモンのデザイン描いてるのか？」

そう聞いた陸。

「うん、これしか手伝えることないし・・・」

そう答えた隼人。

「まあ、もうすぐ完成だしな・・・出来上がったら一緒にゲームやってみような隼人」

「うん！」

そんな訳でゲーム完成に期待を膨らませている隼人と陸。

そして・・・。

それから数日経ち・・・。

あの出来事が起きた日を迎えるのであった。

ファイル2：開かれたゲート

その日・・・。

隼人はいつものように兄の陸、父の光雄と共に仕事場のあるビルに向かった。

すでにゲーム作成はほぼ完了をむかえており、後は最終調整を行うだけとなっていた。

「じゃ、父さんと俺とでパパッと終わらせるから待っててくれな隼人」

そう告げた陸。

「うんっ、こっちのパソコンの所にいるよ」

そんな訳で、最終調整で使われていなかったパソコンが置いてある席に座った隼人はパソコンを起動させた。

最終調整が終わるまでパソコン内に入っている別のゲームで遊ぶようである。

隼人がそんなことをしている周りでは、それほど大変ではないが忙しく作業をしていた光雄と陸。

だが、そんな状況の中で新しいゲーム内のデータの中で小さな異変が起き始めていた。

そんな時、作業員の一人に呼ばれこの部屋から離れてしまった光雄。

そして、この部屋に隼人と陸。

そして、作業員二人ほどしかいない状況で事態は動き出すのであった。

「よし、後はこっちのを最終調整すれば終わりだな」

そう言いながら作業をやっていく陸。

そんな中、別パソコンでゲームをやっていた隼人は画面に今まで見たこと無いアイコンがあるのに気付いた。

「何だろ・・・」

そう思いながらそのアイコンをクリックした隼人。

と、開かれた画面。

「メール？」

開かれた画面の中にメールのアイコンが入っていた。

「・・・・・・・・」

当然気になった隼人は、そのアイコンもクリックした。

そして、開かれたメール。

その内容を見て隼人は驚いたのであった。

【SOS・・・】

その文字だけがメールの内容に書かれていた。

「これもゲームの一種なのかな・・・」

好奇心からかSOSの文字にマウスを操作して矢印を合わせてみた隼人。

するとどうやらクリック出来るようである。

「誰かが助けを求めてるなら・・・」

そう思いクリックしてしまった隼人。

その瞬間、パソコンの画面から眩しい光が放たれたのであった。

「な、何!？」

いきなりの事で驚く隼人。

「隼人!？」

隼人に近付こうとする陸であったが、あまりの眩しさに前へ進むことが出来なかった。

「これは・・・」

光が部屋中に広がっている中、何とか作業していたパソコンの画面を確認した作業員がそう呟いた。

「どうしたんだ・・・」

その作業員に声をかける陸。

「ゲーム内のデータに変化が・・・」

そう告げた作業員。

「どういう事なんだ」

「こちらからのアクセス受付ません・・・なおもデータ変化中・・・」

この状況に陸はどうすればいいか答えが出なかった。

「誰でもいいから父さんと呼んできてくれ・・・俺は隼人を・・・」

何とかして隼人を光の中から出そうとする陸。

そして隼人はというと、画面から溢れ出している光によって目が眩み、身動きできないでいた。

「さっきの・・・クリックしたから・・・なの・・・」

外から聞こえる陸の声。

だが、それに答える事が出来ない隼人。

そんな時

『助けて・・・』

隼人はその小さな声を聞いた。

「今の声・・・あのメールの・・・」

そして隼人は、この眩しさの中目を開くのであった。

目を開きパソコンの画面を見ようとする隼人。

「あれ・・・」

さっきまでと何かが違うことに気付いた隼人。

光は溢れ続けているのだが、今は全然眩しくないのであった。

「これって・・・もしかして・・・」

隼人はパソコンの画面に映し出されたものに驚いた。

ぼやけている感じだったが、それは人ではなくモンスターのようなものだった。

「デジモン・・・デジモンが助けて・・・」

そう呟いた隼人。

と、無意識のうちに隼人はパソコンの画面に手を伸ばしていた。

「助けを求めているなら・・・助けてあげたい・・・」

そんな思いを持ちながら、ゆっくりと画面に触れた隼人。

と、その瞬間さっきまで溢れていた光は一瞬で消えた。

そして、パソコンの前から隼人の姿も光と共に消えていたのだった。

「隼・・・人・・・」

この出来事に驚く陸。

「陸！一体何が起きたんだ」

作業員に呼ばれて戻ってきた光雄。

だが、陸はそれに対して説明することが出来ないのだった。

ファイル3：デジタルワールド

吹き抜ける少し冷たい風。

それは隼人の意識を覚まさせるには十分だった。

「うつっ・・・」

目を開き身体を起こす隼人。

「僕一体・・・」

そして辺りを見て隼人は驚いた。

そこはさっきまでいた部屋ではなく、草原のような場所だったのである。

「ここって・・・」

とりあえず立つて更に辺りを見てみる隼人。

「誰もいない・・・お兄ちゃんや他のみんなは・・・」

と、そんな時突然近くの草むらが揺れ始めた。

「誰・・・」

じっとその場所を見る隼人。

しばらくしてその揺れがなくなった。

「あれ？」

だが、次の瞬間何かが草むらから飛び出してきたのだった。

「あっ……」

普通は驚くものだが、隼人はそれを知っていたのか驚かなかった。

「ミルモン……」

「来てくれたね、隼人！」

と、隼人に飛びついてきたミルモン。

「僕がお父さん達に頼まれて描いたデジモンの中の一体……じゃあ……ここって……」

ミルモンとの接触がここが何処かというのを隼人に理解させていた。

そう、ここはデジモン達が存在するデジタルワールドなのであった。

「ミルモン……」

「どうしたの？隼人」

そう聞くミルモン。

「ここってやっぱりデジタルワールドなんだよね」

頭の中ではわかっている事なのだが、聞いてしまう隼人。

「うん、そうだよ」

当然の答えがミルモンから返ってきた。

そんな時ふと思い出した隼人。

「ミルモン・・・あの時僕に助けを求めてたのって・・・ミルモンなの？」

聞いてみた隼人。

「うん」私願った・・・そしたら隼人来てくれた」

笑顔でそう言うミルモン。

「でもどうして・・・僕が考えたデジモンだけどそれなら他にもいるし・・・」

何故かを考える隼人だが、答えは出なかった。

「ミルモンはわかる？」

一応聞いてみた隼人。

「私にもわからないけど・・・多分・・・」

と、ミルモンは何処からかアイテムを取り出した。

「それってもしかして・・・デジヴァイス？」

しかし、隼人はすぐに疑問を持つことになった。

「これ・・・本来の違う形も・・・」

隼人がそう言うと

「うーん・・・よくわからないけど私はこれで隼人とつながったから」

嬉しそうに言うミルモン。

「パートナー・・・って事だね」

そう言いながら隼人は、ミルモンからデジヴァイスを受け取ったのであった。

ファイル4：真実

隼人がデジタルワールドへ飛ばされた中、光のおさまった部屋の中では……。

「すぐに原因を調べてくれ、陸は隼人が見ていた方のパソコンを調べてくれ」

「わかった」

光雄の指示を受け動き出す陸や研究員達。

「隼人……」

とはいえ、考えてもいなかった事が起きたためどうすればいいのか光雄にもわからなかった。

「父さん！隼人が見ていたパソコンの方にデータが……でも、俺達で作ってたゲームのデータが入ってるパソコンとつながっているみたい」

「どういうことだ・・他からデータが入ってこないように他のパソコンとは回線を切っていたのに」

驚いている光雄。

「大変です……ゲームのデータに異常な変化が……」

そんな中陸はとある画面を見てしまうのだった。

「これはゲーム内のマップか・・・やっぱり地形とか作成の時と変化して・・・」

だが、その中でマップ内に小さな点がいくつかあることに気付いた陸。

「父さん、これ」

「何なんだ・・・この反応・・・しかし、何も手がかりがない以上ここから探すしかないな」

そんな訳で、現実世界の光雄や陸達は原因解決のため動き出すのであった。

現実世界でそんな事が起きている頃・・・。

隼人はデジタルワールドで、ミルモンから受け取ったデジヴァイスを眺めていた。

「機能は父さんが考えたデータと同じみたいだけど・・・でも、何だろう」

疑問に思ふことばかりの隼人。

「あのね隼人」

と、ミルモンが話しかけてきた。

「どうしたの？」

尋ねる隼人。

「それデジヴァイス同士の反応わかるの、それで仲間を見つけるの」

「そっか仲間を・・・って、仲間!？」

「うん♪私と同じようにデジヴァイス持ったデジモンがこの世界の何処かにいて、隼人みたいに選ばれた人が来るの」

そう説明するミルモン。

「僕以外にも来ている人がいたんだ」

驚く隼人。

「みんなで力を合わせてデジタルワールドを救って隼人」

そうお願いするミルモン。

「少し作ってたゲームと違うけど・・・とりあえずデジヴァイスを頼りに仲間を探せばいいんだよね」

そう言う訳で隼人はミルモンと共にデジタルワールドの大地を進み始めるのであった。

ファイル5：最初の仲間（1）

とりあえずミルモンと共にデジタルワールドの大地を歩く隼人。

とは言っても、ミルモンは何故か隼人の頭の上にいた。

「楽そうだね、ミルモン」

隼人がそう言うと

「ここ、気に入っちゃった」

嬉しそうに言うミルモンに対して、隼人もとりあえず笑みを見せた。

「でも・・・違うのは僕のデジヴァイスだけじゃない・・・フィールドも父さん達が作った景色と少し違う・・・」

そう言いながら隼人はデジヴァイスを見た。

デジヴァイスの機能は変わっていなかったたので、隼人は操作してマップを開いた。

今歩いている方角を上にして、その先を見てみると二つの点が表示されていた。

「この先に同じようにデジタルワールドに来た人が」

「うん、だからそこに急ぐ」

隼人の頭の上でそう言うミルモン。

「そっだミルモン・・・僕達ってどうやって元の世界に帰れるのかな？」

聞いてみた隼人。

「わからないけど・・・この世界救ったら戻れるかも」

そう告げたミルモン。

「・・・・・・・・」

ゆっくり歩む中で、隼人は何かを考えながら空を見上げていたのだった。

「う」

歩きながら何やらニコニコしていた隼人。

「どうしたの？隼人」

頭の上から聞いてきたミルモン。

「野生のデジモンが可愛くなって」

デジモンのデザインは大抵隼人がやったため、それを間近で見れて嬉しいのである。

「でも、ゲームの世界なら父さん達が考えたサブキャラクターとか

も登場するのかな・・・」

そんな事を考えながら歩いていると、目の前に長い吊り橋が見え始めてきた。

「揺れそうだね」

「隼人、あっち」

ミルモンが示した先、橋を渡った先に街が見えていた。

「街だ・・・デジヴァイスの反応も街からみたいだ」

「隼人行こう」

頭の上で飛び跳ねるミルモン。

「わかったから静かにしててね」

ミルモンを大人しくさせてから、隼人は吊り橋を渡り始めた。

やはり隼人の予想通り、揺れる吊り橋。

「んっ・・・ゆっくり歩けば・・・」

怖がりながらも時間をかけて渡り終えた隼人。

「ふうっ」

「街の入り口だよ」

気持ちを落ち着かせて見ると、結構大きな街だった。

「マップで見ないとわからなかったけど、この街周りは全部崖で東西南北に吊り橋があつてそれぞれ別のエリアに行ける・・・みたい」

誰に説明しているわけではないが、説明していく隼人。

「それじゃ、レッツゴー」

ミルモンのノリにのせられる形で、隼人は街の中に入っていくのであつた。

「でもやっぱりデジタルワールドの街なんだね」

歩きながらそう言う隼人。

周りには色んなデジモン達が歩いていた。

「このエリアには街はここ一つだけだし、他の四つのエリアと道がつながっているからデジモンの行き来が多いんだね」

そう言う隼人。

「・・・」

と、頭の上でキョロキョロしていたミルモン。

「どうしたの？ミルモン。何処に行きたいところある？」

そう聞いた隼人。

「うっん、感じるの・・・近くに・・・」

ミルモンがそこまで言ったとき、隼人はデジヴァイスのマップを確認した。

「反応が・・・近いよ」

驚く隼人。

歩いている内にいつの間にか接近していたようだった。

「私を感じたの・・・その人達のパートナーデジモンだよ」

そう告げたミルモン。

「それじゃ会いに行こう。ミルモン、振り落とされないようにね」

そう言って駆け出す隼人。

マップをチラチラ見ながら街の中を走っていく隼人。

「もうすぐだ・・・この曲がり角を・・・曲が・・・」

しかしその直後、隼人は誰かにぶつかりその場に倒れたのであった。

「ひゃっ」

頭の上に乗っていたミルモンは、反動で弾き飛ばされていた。

「ごめん、ちゃんと前見てなくて・・・」

そう言いながら相手を見た隼人。

「うっん、私の方こそ・・・」

そして、互いに相手を見て少しの間沈黙の時間が流れた。

「君って・・・」

「貴方って・・・」

同時にそう言った隼人と相手。

「何をしてるんだ未来・・・」

そう言いながら未来と呼ばれた人の後ろからやってきた少年。

「あつ、刹那・・・」

そう言って起きあがる未来。

隼人も起きあがると、近くで転がっていたミルモンを抱えた。

「ねえ・・・君達も・・・」

「貴方もいきなりここにやってきたのね」

そう言う未来。

「未来・・・そんな軟弱そうな男に構うな・・・行くぞ」

そう言った刹那。

「そう言うわけにはいかないでしょ！彼だって仲間の一人なんだから。そうよねピュアモン」

未来は自分に寄り添うようにしていたデジモンにそう言った。

「そう、パートナーデジモンを持つ人・・・選ばれた人達よ」

そう告げたピュアモンであった。

「たとえ必要な奴だとしても軟弱な奴とは一緒にいたくはないな」

そう告げた刹那。

「刹那・・・」

と、そんな時刹那の隣にいたデジモン・チクモンが

「だが、いずれは必要となる・・・人間も・・・俺たちパートナーデジモンも・・・」

「生き残っていればだがな」

チクモンの話にそう付け加えた刹那。

「もう、やめてよ刹那」

そう言う未来。

だが、こんな時に大変な事態が起きるのであった。

突如、街の外で起きた爆発。

「えっ、何」

驚く未来。

「ミルモン・・・今のって・・・」

爆発が起きて煙が上がっている方を見る隼人。

「南の方角か・・・」

そう呟いた刹那。

「南・・・」

隼人はすぐにデジヴァイスのマップを調べた。

「僕たちが来た方角だ」

そう告げた隼人。

「余計な奴でも引つ張って来たんじゃないのか？」

そう言った刹那。

「刹那、少し強いのが来るぜ」

そう告げたチクモン。

「強いのは……」

「隼人、どうする？」

尋ねるミルモン。

「とにかく行ってみよう」

そう言うミルモンを頭に乗せて走り出した隼人。

そして、そんな隼人をじっと見ていた刹那。

「ちょっと……私達も」

刹那にそう言う未来。

「あんな奴がどうなるうとも関係ないが……俺が行かなくても未来は行くだろうからな」

そう呟くとやる気なさそうに歩き出すのであった。

ファイル5：最初の仲間（2）

一足先に爆発のあった現場に向かっていた隼人とミルモン。

「マップに反応とか出れば探しやすいんだけど・・・でも本当なの？
ミルモン・・・これがデジモンの仕業って・・・」

尋ねる隼人。

「うん・・・この近くで感じられる力で一番大きいです・・・」

「そんなデジモンがいるの・・・」

隼人がそんなことを考えていると、突然前方から何かが飛んできて隼人達の横を通り過ぎていった。

「えっ・・・」

そして、後方で爆発が起きその勢いに押されて転倒してしまった隼人。

「いてて・・・今のって」

起きあがろうとした隼人。

だが、そんな隼人の前に先ほど攻撃してきたデジモンが姿を見せたのだった。

「隼人！」

そのデジモンと隼人の間に入るミルモン。

と、そんな時隼人握っていたデジヴァイスが新たな機能を発動させたのであった。

デジヴァイスの画面に映し出されたそのデジモンの姿。

と、そのデジモンは大きく腕を振り上げていた。

「隼人！」

ミルモンが名前を呼ぶが、この出来事によって隼人には声が届いていなかった。

そんな時、刹那達が追いついてやってきた。

「あのままじゃ・・・」

そういう未来。

そして、隼人に向かって振り下ろされた腕。

「本当に足手まといな奴だな・・・チクモン！あいつの動きを少しでもいいから止めろ！それから未来！デジヴァイスであいつのデータを」

的確に指示を出す刹那。

「おう」

「わかった」

同時に返事をするチクモンと未来。

「ニードルショット!!」

チクモンが相手の腕めがけて技を放った。

わずかの時間チクモンの攻撃に怯んだのか腕を止めた相手。

だが、すぐに隼人に向けて腕を振り下ろす相手。だが、そのわずかな時間で刹那は更に動いていた。

「かわせ!死にたいのか」

そんな刹那の声は何とか隼人に届いていた。

「!？」

自分の前にいたミルモンを抱きかかえると横に飛び退いた。

「・・・っ・・・」

チクモンがわずかな時間を稼いだおかげで相手の攻撃は、隼人の腕をかすっただけですんだのだった。

「大丈夫?隼人」

心配するミルモン。

「うん・・・」

そして相手デジモンのデータを見ている未来。

「メタルデビモン！？・・・何・・・」

データを見て驚く未来。

「成熟期か・・・見たこと無い奴だな」

そう言う刹那。

「刹那、助けてあげて」

そう言った未来。

「チクモン・・・スタンバイだ」

「ああ」

メタルデビモンを睨みつけるチクモン。

何とかメタルデビモンから離れ未来達と合流した隼人。

「大丈夫だった？」

そう言う未来。

「違う・・・あんなデジモン登場なんて」

そう告げた隼人。

「普通のデビモンと違い腕と身体の一部がメタルコーティングされているのか・・・チクモン・・・とりあえず腕の攻撃に気をつける」

刹那がそう伝えると

「問題ないぜ・・・刹那」

そう答えたチクモン。

隼人と入れ替わる形でメタルデビモンに近付く刹那とチクモン。

「未来さん・・・あの人は・・・」

「大丈夫だよ・・・あまり人と一緒にいるの好きじゃないお兄ちゃんだけどね・・・」

と、デジヴァイスを構える刹那。

「行くぞチクモン」

「おう！」

そして光り輝く刹那のデジヴァイス。

「チクモン進化！！」

デジヴァイスから放たれた光に包まれていくチクモン。

「ニードラモンー!!」

そして光が消えると翼を生やした新たなデジモンがそこに誕生したのであった。

「進化・・・チクモンが・・・」

驚いている隼人。

「未来もその足手まといも後ろに下がっている・・・あいつを相手にするのは俺達だけでいい」

メタルデビモンから視線を外すことなくそう言った刹那。

「未来さん・・・あのデビモンは違う・・・同じ成熟期でも・・・」

隼人がそう言う

「大丈夫だって・・・刹那、性格はあんな感じだけど・・・この街に来る途中で私を助けてくれたから・・・」

「その時に進化を・・・まだパートナーデジモンとは出会ったばかりのはずなのに・・・」

そう思った隼人。

「飛べ、ニードラモン」

刹那の指示で上空に飛翔するニードラモン。

と、それをチャンスと見たのかメタルデビモンは刹那に向かっていった。

「刹那さんが！」

叫ぶ隼人。

だが、刹那は逃げはせずじっと立ったままだった。

と、突然上空から何かがメタルデビモンに降り注いだ。

「ニードスコール！」

雨のように降り注ぐ針。

その攻撃はメタルデビモンの動きを止める分には丁度よかった。

「メタルデスクローー！！！」

苦し紛れの攻撃を刹那に向けて放ったメタルデビモン。

「その攻撃は読んでいる」と、上空から急降下してきたニードラモンが刹那を掴んで再び飛翔した。

そのおかげでメタルデビモンは地面に自分の技をくらわせたのであった。

ニードラモンを睨みつけるメタルデビモン。

「これ以上時間をかける必要はないな・・・ニードラモン、とどめだ」

「わかったぜ、刹那」

と、刹那を抱えたまま光に包まれるニードラモン。

「ニードリングスターズ!!」

翼で自分を包み針を逆立たせ、まるで流星のようにメタルデビモンに突撃していくニードラモン。

そして、そのままメタルデビモンを貫き地上に降りたニードラモン。

「エンドだ」

刹那がそう言うのとメタルデビモンはその場で消滅していったのであった。

「終わったな」

ニードラモンはチクモンに戻ると刹那の側に寄った。

「行くぞ未来」

と、歩きだす刹那。

「行ってくて・・・じゃあ隼人君も一緒に・・・」

未来がそう言う

「俺は足手まといと一緒に行動するつもりはない・・・」

振り向きそう告げた刹那。

「足手まといって・・・」

「未来がその足手まといと一緒に行動するというなら俺は一人でいい」

「そんな・・・」

少し悲しそうな表情を見せる未来。

「僕なら大丈夫です・・・この世界が父さん達が作ったゲームの世界と同じなら上手くやっていけると思うし」

そう言った隼人。

「わかったわ」

少しの間考えていた未来だったが、そう言つと刹那の方を向いた。

「私は隼人君と一緒に行く・・・だって仲間だし・・・放っておけないじゃない」

そう告げた未来。

「わかった・・・なら俺は俺で行く・・・そんな足手まといと一緒にじゃまともに旅は出来そうにないだろうがな」

そう言うと刹那は西の方にある橋に歩いていってしまったのだった。

「ごめんなさい隼人君・・・刹那が・・・」

「大丈夫・・・でもよかったの？お兄さんと一緒にいなくて」

隼人がそう言うと

「うん・・・本当は私も足手まといにしかなくてなかったと思うから・・・デジモンが襲ってきた時も何も出来ないで」

「未来さん・・・」

「でもきつと見返してやるから・・・だから頑張ろう隼人君。刹那が悔しがるくらいに強く・・・」

そう言い隼人の手を握った未来。

「強く・・・うん、そうだね・・・僕も頑張るよ」

こうして隼人は新たな仲間・柊未来を加えデジタルワールドの旅を続けていくのである。

ファイル6：絆と信頼（1）

刹那と別れ二人で進むことにした隼人と未来。

「刹那は西に向かったけど私達は どうする？」

そう聞いてきた未来。

「僕は南から来たから・・・えつと未来さんたちは・・・」

「私達は北エリアからここに来たの・・・だから選択肢は・・・東・・・」

東の方を見る隼人と未来。

「どちらにしてもここにずっといない方がいいよ・・・メタルデビモンを倒したことで何か別のデジモンが来るかもしれない」

そう告げたピュアモン。

「私も同じ意見だよ。それに他の街に行けば別の仲間に会えるよ」

そう言うミルモン。

「そうだね、悩んでも仕方ないし行こう」

ここに来た時ミルモンはいたが同じような子供は誰も一緒にいなかった隼人。

だからこそ、未来の存在は隼人にとって大きなものであった。

「ここが東の橋・・・ここを渡ると別のエリアに入るわ・・・街に着くまでは野生のデジモンが襲ってきたりするけど・・・」

そう言った未来。

「そう言えばミルモンもピュアモンもまだ進化できないんだよね」

そう言う隼人。

「大丈夫よ・・・私もミルモンも時が来れば進化できる。そして、その鍵はデジヴァイスと貴方達の心よ」

そう告げたピュアモン。

「心か・・・」

ピュアモンの言葉を聞いて少し考える未来なのであった。

色々話をしながら橋を渡り次のエリアに入ってしまった隼人達。

「何もない平原だね・・・」

そう呟く隼人。

「マップだと・・・しばらく行かないと何もなさそうよ・・・一応食料とかはさっきの街で調達してきたけど・・・」

バッグの中を確認しながら言う未来。

「二人はマップとかを見ていて。私とピュアモンはデジモンの気配を探っているから」

そう言うミルモン。

「気配が近づいてくれば私たちが知らせるわ。そうすれば対処もしやすいから」

そう告げるピュアモン。

「うん、お願いね」

と、言うことでデジモン関係はミルモン・ピュアモンに任せ、二人はマップを見ながら歩みを進めていた。

だが、そんな様子を遠くの場所から見ていたデジモンがいたのであった。

「あれが噂の人間か・・・あの街でデビモン系を倒したという・・・」

「スコルピモン様・・・倒したのは別の者ですが、その者はまったく逆の方角に向かいました・・・」

そう報告する部下らしいデジモン。

「都合がいいな・・・モグモン部隊・・・作戦通りに動き奴らをしとめる・・・だが、なるべく生かして捕まえろ・・・デジモンはいいとして人間は高くなりそうだからな」

そう告げたスコルピモン。

「はっ」

そう言つとモグモン達は地中へと姿を消した。

「さて、俺は時が来るまでエネルギー補給しておくか・・・万が一もあるしな」

そう言つと何処かへと消えていったスコルピモン。

そして、何も知らない隼人達というと楽しそうな歩いていた。

「心配は大丈夫？」

「うん、遠くに心配はあるけど近づいてくる様子はないよ」

そう告げたミルモン。

「こついう時自転車でもあれば少しは楽なのに・・・って、デジタルワールドじゃあるわけないか・・・」

そう言つ隼人。

と、そんな時モグモンが地中から隼人達の方へ向かってきていたのであつた。

だが、そんな事は知らず次の目的地を目指して進んでいた隼人と未来。

「あれ？」

と、頭の上でそんな声を上げたミルモン。

「どうしたの？ミルモン」

声をかける隼人。

「うん．．．とっても小さいけどデジモンの気配を感じる．．．でも、小さすぎて詳しい場所がわからないの」

そう言うミルモン。

「それってどういうこと？ピュアモン」

尋ねる未来。

「デジモンの進化レベルは二人とも知ってるかしら？」

ピュアモンが尋ねると

「僕は全部わかるよ」

「私もある程度なら．．．」

そう言う隼人と未来。

「私やミルモンは成長期なんだけど．．．その下のレベル・幼年期なら気配もとても小さいものの」

そう説明するピュアモン。

「でも辺りはこんな何もない平原だしデジモンがいれば僕たちでも見つけられると思うけど・・・」

辺りを見渡してみる隼人だが、そこにはデジモンの一匹も見あたらなかったのであった。

「気のせいなのかな・・・でも・・・」

やはり気になる様子のミルモン。

「不安要素があるならなるべく早くここを離れた方がいいみたいね・・・」

そう言うピュアモン。

「うん、そうね」

そう決め歩き出そうとしたとき、突然未来の足元の地面に穴が開いたのだった。

「えっ!?!」

「未来!」

その穴にはまり、身体が半分ぐらい地中に沈んでしまった未来。

「何これ!?!落とし穴?」

「未来さん掴まって」

穴から未来を出そうとする隼人。

「あっ・・・」

「どうしたの？未来」

「何かに・・・足を掴まれて・・・」

そう言う未来。

「何かって・・・」

と、隼人達の周辺の地面から数匹のモグモン達が飛び出してきたのであった。

「デジモン！」

「このデジモンは・・・」

「まずは作戦成功！」

そう言うモグモン。

「そうだ・・・デジウ、アイス・・・」

隼人はデジウ、アイスで目の前のデジモンのデータを見た。

「モグモン・・・進化レベルはミルモン達と同じ成長期・・・でも、

何でこんな事・・・」

「貴方達・・・こないたずらしちゃ・・・」

モグモンにそう言う未来だが

「いたずらじゃないよ。スコルピモン様へのお土産だ」

そう未来に告げるモグモンなのであった。

ファイル6：絆と信頼（2）

「スコルピモン？」

「早くも捕まえたか・・・モグモンよ」

その声と共に平原を歩きやってきたスコルピモン。

「蠍みたいなデジモン・・・あれがスコルピモン」

「あいつだけ気配が強い・・・多分成長期の一つ上・・・成熟期のデジモンだよ」

そう告げるミルモン。

「いかにも・・・では、手始めにその人間を連れて行こうか」

「連れて行くって・・・何をするつもりだ」

隼人がそう言うと

「噂には聞いていた人間はこの世界ではレアだからな・・・」

「レアって・・・」

「ピュアモン！」

未来が叫ぶと飛び上がったピュアモン。

「ハートフルスラッシュ！」

ハート型のエネルギー弾を多数放ったピュアモン。

その攻撃を受けてモグモンは怯んでいた。

「お前たちは下がれ・・・報酬は後で払ってやるからな」

スコルピモンにそう言われ退散していったモグモン達。

「隼人・・・私達も戦わないと・・・」

そう言うミルモン。

「でも、ミルモンもピュアモンも成長期でスコルピモンは成熟期・・・僕たちじゃ」

「ピュアモンだったな・・・お前がそいつのパートナーとなったデジモンか・・・」

「だったら何・・・」

そう言うピュアモン。

「大人しく人間を渡せばお前は見逃してやる・・・それどころか・・・」

「ハートフルスラッシュ！」

スコルピモンが言い終わる前に攻撃を放つピュアモンなのであった。

迫ってくるピュアモンの攻撃を眺めているスコルピモン。

「やはりそうか・・・」

そう呟くとその場から移動してピュアモンの必殺技をかわしたスコルピモン。

「ならば・・・ポイズニーニードル！」

スコルピモンの尻尾から放たれた針を受けたピュアモン。

「何・・・身体が・・・」

「ピュアモン！どうしたの」

そう言う隼人。

「俺の攻撃には身体を麻痺させる効果がある・・・そして・・・」

「ピュア・・・モン・・・」

「未来・・・！？」

ピュアモンに向けて放たれた攻撃は、穴に落ち動けなくなっていた未来にも当たっていた。

「身体が・・・痺れて・・・余計に動けない・・・」

そう言う未来。

「では、まずは一人連れて行くのでしょうか・・・」

未来に近づいていくスコルピモン。

（未来さんもピュアモンも動けない・・・刹那さんとチクモンもいない・・・僕が・・・やらなきゃ・・・でも・・・）

強いデジモンを前に戦う勇気が出ない隼人。

「・・・させない！」

と、スコルピモンの前に出たのはミルモンだった。

「ミルモン！」

「ほう・・・自らやられにくるか・・・」

そう言うスコルピモン。

「ダメだよミルモン・・・今の状態じゃ・・・」

隼人がそう言うと

「大丈夫だよ・・・私・・・隼人のパートナーだから」

そう告げたミルモン。

その言葉が隼人の中の何かに伝わっていた。

そして、未来もまた何かを感じその口を開いたのだった。

「隼人君……」

「み、未来さん……」

「私もピュアモンも動けない……だから、後は隼人君とミルモンだけ……」

そう告げた未来。

「でも、僕……スコルピモンに勝つなんて……」

「私は信じてるから……刹那とは違う男の子だけど強い何かを隼人君は心の中に持っている」

確信しているかのようにそう告げる未来。

「お喋りはそこまでだ……ポイズニーニードル」

と、今度は直接未来に向けて技を放ったスコルピモン。

「頼りに……してるよ……隼人……君……」

そして、意識を失った未来。

「未来！」

叫ぶピュアモンだが、ピュアモンも身体が痺れて動けないでいた。

「一人は確実に連れて行かないといけないからな・・・」

未来の目の前まで近づくスコルピモン。

「連れて行かせない！スクリューバウンド！」

身体を丸め回転して体当たり攻撃をするミルモン。

「今更そんな攻撃が効くか！テイルブレイカー！」

大きく尻尾を振りかざしミルモンをなぎ払ったスコルピモン。

「ミルモン・・・」

いつの間にかデジヴァイスを強く握りしめていた隼人。

「僕にあつて刹那さんに無いもの・・・そういえばお兄ちゃんが前に・・・」

思い出す隼人。

「『隼人は好奇心旺盛だけどいざつて時の勇気が無いからな・・・勇気があればどんな事でもクリアできるさ』」

そう呟いた隼人。

「隼人・・・お願い・・・未来を・・・」

そう告げるピュアモン。

「僕は・・・」

デジヴァイスを強く握りしめ隼人はその場から駆け出していた。

もちろん逃げ出したわけではない。

スコルピモンに向かって駆けていたのだ。

「人間が俺に挑むというのか？お前もパートナーのように一撃で粉砕してやる」

尻尾を大きく振り上げるスコルピモン。

「隼人が・・・」

立ち上がるミルモン。

「お前はこいつで痛めつけてから連れて行ってやる。テイルブレイカー！」

振り下ろされるスコルピモンの尻尾。

「ミルモン！僕のパートナー・・・だから力を・・・貸して！」

と、その時隼人のデジヴァイスから光が放たれその画面に【Da】の文字が浮かび上がったのであった。

「えっ、デジヴァイスが・・・」

驚く隼人。

「何だ・・・この光は・・・」

デジヴァイスの光が眩しいのか未来達から少し離れるスコルピモン。

「それに・・・画面に出てる【Da】って・・・」

不思議に思う隼人。

「隼人から・・・力が流れてくる・・・」

と、デジヴァイスの光はミルモンに流れミルモンも輝き出した。

「これは・・・チクモンの時と同じ・・・」

そう告げるピュアモン。

「ミルモン進化！ミラスモン！」

隼人の前に現れたのはミルモンから進化したミラスモンだった。

「ミラスモン・・・」

じつとミラスモンを見ている隼人。

人型をしているミラスモンは、その両腕に円形の透明な盾の様な装備を身につけていた。

「まるでクリスタルみたいな・・・輝き・・・あれがミラスモン・・・」

そう呟くピュアモン。

「成熟期に進化したか・・・だが、この辺りを支配しているこの俺に勝てる奴なんているわけないんだ。テイルブレイカー！」

ミラスモンに放つ尻尾攻撃。

しかし、ミラスモンは腕に装備している盾でその攻撃を防いだ。

「なにっ!？」

驚くスコルピモン。

「どうしました？」

まるで何もなかったかのように告げるミラスモン。

「ならばお前もこいつ等同様に動けなくしてやる！」

と、ミラスモンから距離をとるスコルピモン。

「痺れる！ポイズニーニードル！」

尻尾の先から放たれる毒を含んだ針。

「進化した私に・・・その技は通じませんよ」

ミラスモンが手をかざすと両腕の盾が腕から外れ目の前に移動した。

「ミラースマジック！」

その言葉と共に二つの盾が一つとなりミラスモンの前に、巨大な鏡の幕が張られた。

その幕に針がぶつかると、そのままその針を反射させスコルピモンに返したのだった。

「ぐうつ・・・」

自らの針を受け後退するスコルピモン。

「どうやらダメージは受けても麻痺の影響はないみたいね」

ミラスモンがそう言う

「当たり前だ・・・自らの毒にやられてはシャレにならないから・・・だが、お前のようなデジモンに・・・」

尻尾を大きく振り上げミラスモンに向かっていったスコルピモン。

「貴方が私の仲間達にした事・・・許せない・・・」

と、両腕をクロスさせスコルピモンに向けたミラスモン。

「テイルブレイカー!!!」

全ての力を込めテイルブレイカーを放つスコルピモン。

「ミラージクロスラッシュ」

クロスさせた両腕から放たれた鋭い十字のエネルギー斬。

それは、スコルピモンが振り下ろした尻尾を切り裂きスコルピモンの身体にクロスの傷をつけさせた。

「まさか・・・この俺が・・・こんな奴らに・・・」

と、スコルピモンはその場から消滅していったのだった。

「倒した・・・勝ったの・・・」

驚いている隼人。

「隼人・・・」

と、ミラスモンはミルモンに戻り隼人に飛びついた。

「私頑張ったよ・・・でも、それは隼人のおかげ・・・隼人が力をくれたから」

そう言うミルモン。

「うん・・・そうだ、未来さんを助けないと」

そんな訳で隼人とミルモンは動けない未来とピュアモンを助けるのであった。

ファイル7：未来の想い（1）

スコルピモンを撃退し、未来とピュアモンの麻痺が回復するのを待ってから隼人たちは再び歩み始めた。

「ご免なさい・・・私達のせいで進むの遅くなっちゃって・・・」

謝る未来。

「私もすまない」

同じように謝るピュアモン。

「謝らなくても・・・それに・・・僕は未来さんにお礼を言わないと・・・」

「私に？」

そう言う未来。

「うん・・・ミルモンが進化できたの・・・未来さんの言葉のおかげ・・・あの言葉が無かったら僕・・・何も出来なかった」

「隼人君・・・少し刹那みたいに格好良くなったわよ」

笑顔でそう言う未来。

「でも、まだまだだよ・・・刹那さんみたいにあんな強い人には・・・」

そう言う隼人。

「私は隼人格好いと思うよ」

頭の上でそう言うミルモン。

「ありがとうミルモン」

「迷惑かけたから私がリードしていくわね・・マップでも次の街近いし」

そんな訳で張り切っていく未来なのであった。

未来を先頭にして次の目的地を目指している隼人たち。

「でも、どうしてメタルデビモンやスコルピモンみたいに襲ってくるデジモンがいるんだろう・・」

そう考えていた隼人。

「隼人、私が助けを求めていたこと覚えてる？」

ミルモンがそう言うと

「うん、あの時の事で僕がこの世界にやってきたんだよね」

そう言う隼人。

「私が助けを求めた理由が・・今のこの世界の状況だからなの」

そう答えるミルモン。

「今のデジタルワールドの状況？」

そう聞く未来。

「最近になってああ言ったデジモン達が現れるようになった・・・その原因はわからないんだけど・・・」

そう言うピュアモン。

「それじゃ僕達のやることって・・・それを解決することなの？」

「多分・・・そうすれば隼人たち元の世界に戻れると思う」

そう言うミルモン。

「戻るの嬉しいけど・・・ピュアモンと別れるって事だよね・・・」

少し寂しそうな表情を見せる未来。

「大丈夫だよ未来・・・永遠に会えなくなるわけじゃない・・・そうでしょ隼人」

「えっ・・・」

「この世界は隼人たちが作ったゲームが元となっているんでしょ？」

「うん・・・でも、作っていたときと色々違ってある部分が出てるかから完全に同じじゃないけど・・・」

そう言う隼人。

「きっと大丈夫だから・・・だから別れてもまた会える」

そう未来に言うピュアモンなのであった。

「あつ、見えてきたわよ隼人」

そう言う未来。

「街だ・・・」

そう呟く隼人。

「街の中に強いデジモンの力は感じないけど・・・一応用心しておいて未来」

「うん、判った」

ピュアモンの言葉に対して了承する未来。

この街は隼人が未来・刹那と出会った街より大きく明るい街であった。

「やっぱり街だとデジモンがいっぱいだね・・・ほとんどが成長期とか成熟期のデジモンだ」

デジヴァイスを片手にそう言う隼人。

「ねえ、少し自由行動にしない？時間決めて待ち合わせれば問題ないでしょ」

そう言う未来。

「えっ、うん．．わかった」

どう言うことか理解できていない隼人だが、とりあえずは未来の提案に従うことにした。

隼人・ミルモンと分かれて行動する未来とピュアモン。

「でも、いきなりどうしたの？未来」

「えっとね．．ピュアモン．．デジタルワールドってさ．．」

とあることをピュアモンに尋ねる未来。

そして、未来とピュアモンはある建物に入っていったのだった。

未来・ピュアモンと分かれた後適当に街を歩いていた隼人とミルモン。

「時間までどうしようか．．」

「私は隼人と一緒なら何しててもいいよ」

そう告げるミルモン。

「何しててもって言われても．．やる事がないんだよな．．」

そう言う隼人。

その頃、未来はというと・・・。

「ふーっ、生き返った感じがする」

なにやらご機嫌で建物の中から出てきた。

「何か他にほしいものとかしたいことがあれば言っ。出来ることなら案内するから」

そう言うピュアモン。

「うん、ありがとう」

ご機嫌のまま街を見て回る未来。

だが、そんな状況になっていたので少し離れたところから自分を尾行しているデジモンに気付くことが無かった未来。

そして、ピュアモンもデジモンがたくさんいる街の中でその不審なデジモンの気配に気付いてはいなかった。

「そうだピュアモン、何か食べる物買っていこう。隼人とミルモンの分もね」

そう言うとお店らしい建物に入っていく未来とピュアモンなのであった。

「
♪♪」

歌いだしそうな機嫌のよさで店の中を見て回っている未来。

「ミルモンには何がいいかしら・・・」

そう考えるピュアモン。

同じ店にいる未来とピュアモンだが、今は離れてみて回っていた。

そして、音も無く二人をつけていたデジモンも店内に入っていた。

「隼人君って何がいいかな・・・私だけさっぱりしちゃったし・・・何かいい物買っていつてあげないとね♪」

そう言う未来。そして、そんな未来の背後を通り過ぎる不審なデジモン。

そのデジモンが通り過ぎた後、未来の周辺に甘い香りが漂っていた。

「何この甘い・・・香り・・・あれ・・・」

少し足がふらつく未来。

そして、そのデジモンは香りを僅かに放出させながら店を出て行った。

「・・・っ・・・甘い・・・香り・・・」

ぼんやりとした表情になった未来は、何かに引き寄せられるように

店から出て行った。

「そうだ・・・未来にこの世界でのお金・・・あれ？」

いつの間にか未来がいなくなっている事に気付いたピュアモン。

だが、僅かに甘い香りが残っていることとそれから微かに強いデジモンの力を感じたピュアモン。

「まさか未来に・・・」

それを知ったピュアモンは急いで店を飛び出していったのだった。

ファイル7：未来の想い（2）

「未来・・・」

パートナーである未来を心配し辺りを探し回るピュアモン。

その頃未来はと言うとぼんやりとした表情のまま、甘い香りを放っているデジモンを追いかけて歩いていた。

「何だろ・・・この香り・・・とっても・・・いい気持ちになる・・・」

そんな事を呟きながら歩いている未来。

そして、こちらは隼人とミルモン。

「そろそろ時間だし集合場所に戻ろうか？ミルモン」

「うん、隼人と一緒だったから楽しかったよ」

「よかったね」

そう言う隼人。

そして、隼人が集合場所に向かおうとしたその時遠くに未来の姿を見つけたのだった。

「あれって・・・未来さん？でも、集合場所とは全然違う方に言ってる・・・もう時間なのに・・・」

「・・・隼人・・・何か感じる・・・強いデジモンの力だよ・・・未来が
いる方から・・・」

そう言うミルモン。

「行ってみよう、ミルモン」

ミルモンを頭に乗せたまま駆け出していく隼人。

そして、街の外れまで来たとき不審なデジモンはその足を止めた。

「さあ、来るのです・・・私の力に囚われた乙女よ・・・」

と、そのデジモンの前までやってきた未来。

「貴方は・・・誰・・・」

ぼんやりな表情で静かにそう尋ねる未来なのであった。

「私はフラウモン・・・貴方は私の香りに心を魅了されここまでや
ってきた」

そう言うフラウモン。

「フラウモン・・・魅了？」

自分に何が起きているのかは理解できていない未来。

「心配はいりませんよ・・・これから貴方は私のパートナーとなるの
ですから」

「貴方の・・・パートナー・・・」

「古い歴史の中に人間のパートナーとなったデジモンの話があるのです・・・パートナーとなったデジモンは人間の力で更なる進化が出来る・・・」

そう言うフラウモン。

「最高のデジモンになるには貴方の力が必要なのです」

「私の・・・力・・・」

ぼんやりとした表情のままそう呟く未来。

「とはいえただ貴方を連れてきただけではパートナーとなりませんからね・・・貴方の持つ・・・」

フラウモンは未来が身につけているデジヴァイスをみた。

「古い歴史の中に伝えられている人間とデジモンを繋ぐ物・・・あれさえあれば・・・私も・・・」

デジヴァイスに触れようとしたフラウモン。

「ハートフルスラッシュュ!!」

突如フラウモンの身体に衝撃が伝わると共に、フラウモンは吹っ飛ばされた。

「お前は・・・」

「未来から離れなさい・・・」

そう言ったのはピュアモンであった。

「そう・・・まずは今のパートナーであるお前を倒さないかね・・・」

起き上がりながらそう言うフラウモンであった。

睨み合っているピュアモンとフラウモン。

「ハートフルスラッシュ！」

次々と攻撃を放っていくピュアモンだが、全てをかわしていくフラウモン。

「貴方は羨ましいわ・・・人間のパートナーデジモンに選ばれて・・・」

「だったら何なの・・・私は・・・」

ピュアモンがそう言う

「そうね・・・貴方にとってこの人間はとっても大切なのよね・・・だつたら・・・」

未来を見るフラウモン。

「未来・・・そう呼ばれていたわね・・・未来、こちらに來なさい」

「・・・はい・・・」

甘い香りの力で支配されている未来は、警戒することなくフラウモンに近づいていった。

「未来！行っちゃダメ！」

そう叫ぶピュアモン。

「攻撃するの？出来ないわよね・・・下手をすれば未来に当たってしまうから・・・」

そう言うフラウモン。

「未来・・・」

「攻撃はもう終わりみたいね・・・」

「私にとって未来は大事・・・未来のためなら・・・」

ピュアモンがそう言う

「なら、今度はこっちの攻撃よ！バブルフラワー！」

と、泡で出来た複数の花がピュアモンの身体にくっついた。

「それじゃ・・・さようなら」

フラウモンが合図を送るとピュアモンにくっついてた泡の花が一斉に爆発したのであった。

「未来・・・」

そう呟きながら倒れるピュアモン。

「美しい技でしょ・・・見た目の綺麗さから一転した強力な攻撃力・・・成長期の貴方には耐えられるものじゃなかったみたいだね」

そう言うフラウモン。

「・・・」

倒れているピュアモンを虚ろな表情で見ている未来。

「それじゃ・・・未来・・・私のパートナーに・・・」

再び未来のデジヴァイスに触れようとするフラウモン。

「ピュアモン・・・」

微かに小声でそう呟いた未来。

と、その時

「ダメです!」

いきなりフラウモンに体当たりしてきたデジモンがいた。

「なっ・・・」

その体当たりにバランスを崩しかけたフラウモンだが、何とか立て直し体当たりしてきたデジモンを払い飛ばした。

「ミルモン！」

遅れてこの場に姿を見せたのは隼人だった。

「・・・もう一組か・・・」

「こいつは・・・フラウモン？」

デジヴァイスですぐに調べた隼人。

「やっと今の未来のパートナーデジモンを片付けたというのに・・・今度は貴方ですか」

「えっ・・・」

フラウモンの言葉に倒れているピュアモンを発見した隼人。

「ピュアモン！」

思わずそう叫んでいた隼人なのであった。

「未来を手に入れるには貴方達も倒さないといけないようですね」

そう言うフラウモン。

「隼人！あいつを倒さないと未来が・・・」

そう言うミルモン。

「うん、わかってる・・・」

デジヴァイスを握りしめる隼人。

しかし、隼人のデジヴァイスが輝きを放つことはなかった。

「えっ、どうして・・・あの時は進化できたのに・・・」

「隙だらけですよ・・・バブルフラワー！」

隼人とミルモンに迫る泡の花。

「ハートフルスラッシュ！」

だが、フラウモンの攻撃は横から飛んできたピュアモンの攻撃によつて相殺された。

「うわっ・・・」

技と技のぶつかり合いによる爆発の勢いで後退する隼人たち。

「まだ動けたのですか・・・しぶといですね」

そう言うフラウモン。

「未来は・・・私のパートナーだから・・・」

「ピュアモン・・・そんな身体で・・・」

そう呟く隼人。

「次で完全に倒してみせますよ・・・」

構えるフラウモン。

「・・・ピュアモン・・・僕達も未来さんを助ける・・・進化できなくなつて力を合わせれば・・・」

「隼人・・・うん・・・お願い！」

そう言うピュアモンなのであつた。

ファイル7：未来の想い（3）

「隼人・・・大丈夫だよね・・・」

心配そうにそう言うミルモン。

「大丈夫だよ・・・ミルモンとピュアモンがいるから・・・上手くいけば未来さんを助けられるから」

そう告げる隼人。

「わかった・・・それじゃ行ってくるね」

と、フラウモンと向かい合うミルモン。

「貴方も成長期なのに私と戦うのですか？」

「隼人たちの敵なら私は戦う・・・」

そう言いフラウモンに向かっていくミルモン。

「そう言うことなら一瞬で終わらせてあげましょう・・・バブルフラワー！」

と、ミルモンはフラウモンの周りをぐるぐる回るように移動し始めた。

「そんな動きで私を惑わそうというのはか・・・無駄ですよ・・・」

攻撃をせずじつとミルモンの動きを見ているフラウモン。

「そこです！バブルフラワー！」

狙いを定めて技を放つフラウモン。

「ハートフルスラッシュ！」

と、フラウモンの技に合わせてピュアモンが技を放った。

「なにっ・・・」

そして、技同士がぶつかり辺りは爆煙に包まれていった。

そして、煙で視界が悪くなっている中その中で聞こえる駆けっていく音。

「未来さん！」

フラウモンから少し離れた場所に立ったままになっていた未来の手を隼人が掴みその場から更に駆け出していくのであった。

「私に相応しくないパートナー・・・お前はここで消えなさい！バブルフラワー！」

隼人に狙いを定めて技を放つフラウモン。

「未来さん、こっち！」

未来の手を掴んだまままた駆け出す隼人。

「これ以上隼人に攻撃させない！」

と、フラウモンに体当たりするミルモン。

「邪魔です！」

フラウモンは自分の腕でミルモンを弾き飛ばすと逃げる隼人に視線を戻した。

「冷静になれば貴方を倒すことなど簡単・・・広範囲に放てばいい・・・バブルフラワー！」

今度は広い範囲に技を放つフラウモン。

「ダメだ・・・未来さんを引っ張りながらじゃフラウモンの攻撃範囲を抜け出せない・・・」

そう告げる隼人。

と、そんな時隼人と未来の前に飛び出したデジモン。

「ピュアモン！」

二人の前に飛び出したピュアモンは、自分の背中で隼人たちに命中しそうだったフラウモンの技を全て受けたのであった。

「隼人・・・未来を連れて・・・」

そして、そのまま倒れるピュアモン。

「自ら死ににきましたか・・・しかしこれでようやく未来のパートナーとなることが出来る・・・」

「ピュアモン・・・」

と、微かに小さな声でそう呟いた未来。

「未来さん・・・」

「・・・いや・・・」

そう呟いた未来はいつの間にか光を失った瞳から涙を流していたのだった。

「未来・・・さん・・・」

「ごめん・・・未来・・・守ってあげられなくて・・・」

そう呟くピュアモン。

「・・・ダメ・・・ピュアモン・・・」

と、未来の流した涙が腰に身につけていたデジヴァイスに触れた。

その瞬間デジヴァイスから眩しい光が放たれた。

「未来さんの・・・デジヴァイスが・・・」

そう言う隼人。

そして、そのデジヴァイスの光は未来を包んでいった。

「何だ・・・何が起きている・・・」

そう言うフラウモン。

そして、デジヴァイスからの光が消えるとじっとフラウモンを見つめる未来。

「・・・一体何が・・・」

そう呟くフラウモン。

「貴方は絶対に許さない・・・ピュアモンを・・・そして、隼人君たちを・・・貴方は私たちで倒すんだから」

と、身に着けていたデジヴァイスを掴む未来。

すると、再び輝き出すデジヴァイス。

「未来さんのデジヴァイスの光が・・・ピュアモンに・・・」

「力が・・・溢れてくる・・・これなら・・・戦える！」

そう告げたピュアモン。

「ピュアモンに力を・・・お願い！」

「ピュアモン進化！ハニーエンジェモン！」

ピュアモンは心優しき天使型のデジモン・ハニーエンジェモンに進化したのであった。

「あれって・・・天使・・・」

そう呟く隼人。

「ハニーエンジェモン・・・ピュアモンが進化した・・・」

そう言う未来。

「ありがとう未来・・・貴方のおかげで進化できたよ・・・」

そう告げるハニーエンジェモン。

と、その様子を見ていたフラウモン。

「その力だ・・・デジモンを進化させる力・・・私も進化するために・・・お前が欲しいのだ・・・未来！」

そう告げるフラウモン。

「未来は渡さない・・・私が守ってみせる」

と、翼を羽ばたかせ宙に浮くハニーエンジェモン。

「バブルフラワー！」

と、突然攻撃するフラウモン。

「ハニーフェザー！」

と、翼を羽ばたかせるとその翼から羽根を放出しフラウモンのバブルフラワーを撃ち落していった。

「グッ・・・」

「今の私は貴方と同じ成熟期・・・もう負けない」

と、輝くハニーエンジェモンの身体。

「何を・・・」

「シャイニングウイング！」

と、身体全体から放出された光のエネルギーがフラウモンに向かって飛んでいった。

「こんなもの・・・バブルフラワー！」

一点に集中してバブルフラワーを放つフラウモン。

しかし、ハニーエンジェモンの攻撃の勢いは衰えていなかった。

そして、シャイニングウイングはそのままフラウモンを貫いていったのであった。

そして、消滅していったフラウモン。

フラウモンを倒したハニーエンジェモンは地上に降りるとピュアモンへと戻った。

しかし、その直後足元がふらつき倒れそうになるピュアモン。

「ピュアモン！」

とっさにピュアモンを支える未来。

「ピュアモン、どうしちゃったの・・・」

そう言う隼人。

「進化する前結構ダメージを受けていたから・・・その影響だと思う・・・」

そう言うミルモン。

「そうだ・・・あの時ミルモン進化できなかったけど・・・ピュアモン何か判らないかな・・・」

そう告げる隼人。

「私にもそれは判らない・・・けど・・・隼人のデジヴァイスは・・・未来たちとは違うから・・・それが原因かもしれないわ・・・」

そう考えるピュアモン。

「この前進化できたからこれから未来さんを守るって思ってたけど・・・上手いかないみたいだね・・・ミルモン」

そう言うとな隼人の頭の上に乗るミルモン。

「大丈夫だよ・・・今度は進化できるように頑張る」

そう言うミルモン。

「そうよ、それに今度はピュアモンも進化できる・・・一緒に頑張っていきましょう」

笑顔でそう告げる未来。

そして、未来はピュアモンを支えながら歩き始めた。

隼人もそんな未来と共に休める場所に向かうのであった。

ファイル 8：孤独な戦士と元気な少女（1）

隼人と未来が協力して先へと進んでいる頃……。

二人と別れ別の道を選んだ未来の双子の兄・刹那はというと……。

「……今度は成熟期三体か……組めば勝てると思っているのか？」

刹那とチクモンの前に現れたのは野性の蜂型デジモン・ビーフラモンだった。

空中から威嚇しているところを見ると、刹那とチクモンが縄張りに入ったことにより二人の前に立ちはだかったようである。

「チクモン……やるぞ」

そう告げた刹那。

「本当に戦うの？刹那……」

チクモンがそう言つと

「あいつらは俺達の行く道に立ちはだかっている敵だ……ならば戦うするまでだ」

そう言つ刹那。

「わかった……」

と、ビーフラモンを方を向くチクモン。

「行くぞ・・・」

刹那の持つデジヴァイスが輝くと同時に、チクモンはニードラモンへと進化した。

「!？」

と、ビーフラモンはニードラモンを見て何かを感じたのか四散しニードラモンを囲うように行動し始めた。

「ニードラモン・・・すぐに終わらせろ」

「・・・判った、刹那」

大きく高く飛び上がるニードラモン。

そして、重力を味方につけて一気に急降下していくニードラモンなのであった。

戦いを終えニードラモンはチクモンへと退化した。

すでに、その場にビーフラモンの姿はなくなっていた。

「刹那・・・」

「敵はいなくなっただな・・・いくぞ」

そう言いつと歩き出していった刹那。

「・・・」

それ以上は何も言うことなく刹那の後を追うチクモン。

と、その様子を岩陰から見ている者がいた。

「やっと見つけたで・・・ウチ以外の人間や・・・」

そう呟くその人物。

「当たり前ですよ・・・瞳・・・選ばれたもの以外この世界に現実世界からの人間はいないんですから・・・」

そう言う瞳の隣にいたデジモン。

「何や・・・そんなに真面目な顔で言わんでもええやんか」オルトモン

そう言う瞳。

「で、そこで何をやっている」

「えっ・・・」

いつの間にか瞳&オルトモンの前にいた刹那とチクモン。

「オルトモン・・・普通の四速歩行する獣型のデジモン・・・それに加えて・・・」

瞳を見る刹那。

「ウチは大阪に住んでます高良瞳って言います」

笑顔で自己紹介する瞳。

「それがどうした・・敵なら倒してやろうと思ったが・・また足手まといが一人現れただけか・・いくぞ、チクモン」

何もなかったかのように瞳をスルーして先へ進もうとしている刹那。

「見事に無視されましたね・・瞳」

そう告げるオルトモン。

「クールな人やな・・とりあえずいくで！オルトモン」

と、刹那のあとを追いかける瞳なのであった。

瞳を無視して先を進んでいく刹那。

「・・・」

刹那のパートナーデジモンであるチクモンはというと、チラチラと後ろを気にしながら歩いていた。

そして、瞳とオルトモンはというと刹那と一定の距離であとをついていった。

「・・・」

もう一度後ろを見るチクモン。

すると、瞳の目はキラキラと興味津々に輝かせていた。

と、突然歩みを止める刹那。

それと同時に瞳も止まった。

「どういつつもりだ・俺はお前と一緒に行動するつもりはない・ついてくるな」

「それが刹那君の決めたルールなんやな・ほな・ウチはその刹那君についていくって決めた！」

笑顔でそう言う瞳。

「俺の言葉が通じていないのか？ついて来るなと言っている」

強くそう言う刹那。

「せやから・ん・じゃあ、刹那君と同じ道をただ進んでいるだけって理由ならオツケーやろ」

これまだ笑顔で言う瞳。

「どうするんだ？刹那・」

「・・・馬鹿らしい・関わるな・行くぞ」

瞳と関わるのをやめて再び歩き始める刹那。

「ほな、ウチらも出発や」

半分呆れているオルトモンと共に、刹那のあとをついていく瞳なのであった。

無言で歩き続ける刹那。

そして、少しの距離をあけて刹那のあとをついていつている瞳。

「刹那・・・彼女も仲間なんだし・・・一緒にいてもいいんじゃない？」

そう言うチクモン。

「足手まといと一緒にいてはこちらの戦いに影響が出る・・・なら、一緒にいない方がいい」

そう告げる刹那。

「それじゃ・・・未来も足手まといって思ってるの・・・刹那・・・」

そう言うチクモン。

「・・・未来はまだ甘い所がある・・・だが、あいつが選んだのは俺ではなく足手まといの隼人だ・・・だから俺は一人で進んでいる」

「ふーん・・・そうなんや・・・でも未来ってだれなんや？」

後ろからそう聞いてくる瞳。

「ついてくるな・黙っている」

静かにそう告げる刹那。

「いやや！ウチは刹那君と同じ道に行くって決めたんやから」

きつぱりとそう言う瞳。

「・・・」

瞳を無言で睨み付ける刹那。

「瞳・何であんな一匹狼みたいな奴を気にかけるんだ？」

そう尋ねるオルトモン。

「あーいう人は本当は寂しがりやなんやよ」

そう言う瞳。

「何だと・俺は一人でも問題ない・元の世界へ戻る方法を見つけて出す・そうすればお前たちも戻れるだろ」

「見つけ出すんやったらみんなでやった方が早いやろ・そんな常識やで」

そう告げる瞳。

と、その時急に強い風が辺りに吹き荒れた。

「！・・・チクモン・・・」

「うん・・・感じる・・・嫌なデジモンの気配だ」

そう告げるチクモン。

「オルトモン・・・コレって・・・」

「はい、今まで感じたことのない・・・気配です」

オルトモンがそう言うのと吹き荒れていた風が一箇所に集まりデジモンの姿になっていったのだった。

「お前・・・何者だ？」

尋ねる刹那。

「私はエアルモン・・・とある方の指示でこちらに赴いた者です」

そう自己紹介するエアルモン。

「エアルモン・・・成熟期・・・風の力を操るデジモン・・・」

デジヴァイスで情報を見る瞳。

「つまりは敵と考えていいんだな？」

「はい、とある方は貴方達がこの世界に存在することを望んでおりません・・・人間とそのパートナーデジモンを倒す事が私の使命」

そう告げるエアルモン。

「チクモン」

「わかってる・・・」

前に出るチクモン。

「瞳・・・俺達はどうする?」

オルトモンが尋ねると

「もちろん戦うんや・・・刹那君たちだけに戦わせておけへんやろ」

そう言う瞳。

「お前は引っ込んでいろ・・・足手まといはいらない」

そう告げる刹那。

「心配はいりませんよ・・・貴方たちの相手は私だけではありませんから・・・」

と、手をかざすエアルモン。

「チクモン！先制攻撃だ」

刹那の言葉と共に光り輝く刹那のデジヴァイス。

「チクモン進化！ニードラモン」

成熟期へと進化したチクモン。

「行きますよ・・・」

と、エアルモンの掌から小さな風で作られた鳥が複数出現したのであった。

ファイル 8：孤独な戦士と元気な少女（2）

「何や・・・あれ・・・」

エアルモンの周りを飛び交う小さな鳥達。

「何がどれだけ増えようと俺達には通用しない・・・全てまとめて倒すだけだ」

そう告げる刹那。

「気合は十分のようですが・・・私の分身を甘く見ないでもらいたいですね」

エアルモンがそう言うのと風の鳥達の動きが素早くなっていた。

「刹那・・・エアルモンよりもこいつが厄介なんじゃないのか？」

そう言うニードラモン。

「ならばエアルモンごと倒す・・・ニードラモン！」

「・・・わかった・・・」

そう言うのと飛び上がったニードラモン。

「ニードスコール！」

エアルモンたちに降り注ぐ針の雨。

「そんな攻撃私には通じませんよ．．」

と、エアルモンが手をかざすとエアルモンの前に風の膜が張られニードラモンの攻撃を防いだ。

そして、風の鳥はというとそのスピードで針の雨をかわしていた。

「何をやっているニードラモン！風の鳥はエアルモンが作っている．
・エアルモンを倒せば終わる」

そう言う刹那。

「でも、エアルモンに集中して戦ったら．．風の鳥に刹那が．．」

そう言うニードラモン。

と、その時

「そーいう時にはやな．．」

そう呟く瞳。

「クローディガルド！」

素早く地を駆け風の鳥をその爪で切り裂いたオルトモン。

「地上やったらオルトモンも早いんやで」

そう告げる瞳。

「お前ら・・・邪魔だと・・・」

「ウチもやるで！その代わりそのデジモンは刹那君にあげるから、
うちらはこのすばしっこいの片付けよか！」

そう元気よく言う瞳なのであった。

「・・・どうするんだ？刹那」

そう聞くニードラモン。

「俺達の邪魔をしなければ好きにやればいい・・・俺達はエアルモン
を倒す！ニードラモン！」

と、刹那の前に降り立つニードラモン。

そして、刹那はニードラモンの背中に乗るとニードラモンは再び飛
び上がった。

「刹那君、パートナーと一緒に戦うんやな・・・」

見上げながらそう言う瞳。

「瞳、俺達はこの飛んでる鳥連中を相手にするわけだが・・・」

オルトモンがそう言う

「もちろん全開や！うちらもいくで」

そう言いデジヴァイスを取り出す瞳。

（デジヴァイス・・・あいつ・・・すでにパートナーデジモンを・・・）

ニードラモンの背中から下にいる瞳たちを見ていた刹那。

「この鳥達に見せたるで！うちの力を！」

と、輝く瞳のデジヴァイス。

「オルトモン進化！オルガーマン！」

より大きな身体を持った獣型のデジモンへと進化したオルトモン。

「オルガーマンか・・・流星は成熟期といったところか・・・」

デジヴァイスでデータを見ている刹那。

「刹那！エアルモンが動き出したよ」

そう告げるニードラモン。

「せっかく進化したあいつのデジモンだが・・・俺達がエアルモンを倒せばあいつは戦わずに終わる・・・行くぞ！ニードラモン！」

刹那がそう言うのとニードラモンは空中からエアルモンに向かっていくのであった。

「ニードスコール！」

エアルモンに近づきながら針の雨を降らせるニードラモン。

「無数の針による攻撃で逃げ場を塞ごうとしているようですが・・逃げられないのなら全て破ればいいこと」

エアルモンが手をかざすと、そこから放たれた風が辺りに吹き荒れニードラモンの放った針を全て周囲に弾いてしまった。

「それなら・・」

と、翼で自分を包み込ませるニードラモン。

「ニードリングスターズ！」

そして、一気にエアルモンに突っ込んでいくニードラモン。

しかし、エアルモンは慌てることなくまるで風となるようにフワリとニードラモンの攻撃をかわした。

「今までの奴とは少し違うというわけか・・だが、俺達に倒されることにはかわりはない」

そう言う刹那。

その頃、瞳とオルガーモンの方はと言うと・・・。

「ターツ！」

強くなった腕の力と、鋭くなった爪で宙を舞い続ける風の鳥を倒していくオルガーモン。

「一体何匹おるんや・・・」

辺りを見渡してそう言う瞳。

「エアルモンがいる限りはいくらでも増やせるでしょうから・・・」

「せやな・・・うちの役割はこの鳥が刹那君達の邪魔をせんように戦うことや」

そう言う瞳。

「では、威嚇ついでに放っておきましょうか」

すこし、風の鳥達と距離をとるオルガモン。

そして、口を開くと少しの間静かな時間が流れた。

「バーニングブラスト！」

口から放たれた火炎が複数の風の鳥達を消滅させていった。

「どや！オルガモンは強いんやで」

そう告げる瞳なのであった。

「強いですね・・・彼女のパートナー」

そう言うニードラモン。

「そつちに構う必要はない・・・俺達の敵はエアルモンだ」

空中からどんどん攻撃していくニードラモン。

「単純ですね・・・そんな攻撃・・・私には通じません」

「刹那・・・どうするんだ？」

尋ねるニードラモン。

「出来る限りエアルモンに近づいて・・・広範囲攻撃だ」

「刹那・・・それじゃ背中に乗っている刹那にも攻撃が・・・」

「・・・ニードラモン・・・」

静かに呟く刹那。

「・・・わかった・・・刹那がそれを望んでいるなら・・・」

そう告げるとエアルモンに向かっていったニードラモン。

「次も単純な攻撃ですか・・・どんな攻撃が来たとしても・・・」

余裕を見せているエアルモン。

しかし、攻撃を仕掛けずただエアルモンに向かっていくニードラモン。

「何や・・・何するつもりなんや？」

自分たちの戦いに集中しつつも、刹那たちの戦いを気にする瞳。

「これが刹那の望んだお前を倒す方法だ！ニードスコール！」

エアルモンに接近してから広範囲攻撃であるニードルスコールを放つニードラモン。

「なにつ・・・」

いきなりの攻撃に驚き攻撃を受けてしまうエアルモン。

そして、その攻撃の一部が跳ね返り刹那にもダメージを与えていた。

「刹那・・・」

「問題ない・・・次でとどめだ」

翼で身体を包むニードラモン。

「あの技は・・・」

「ニードリングスターズ！！」

そして、ニードラモンの攻撃はエアルモンにクリティカルヒットしたのであった。

ファイル 8：孤独な戦士と元気な少女（3）

「ぐうつ・・・」

ニードラモンの連続攻撃を受け、その場に倒れるエアルモン。

それと同時に、エアルモンが放っていた風の鳥達は消えていった。

「やったんやな・・・」

そう言う瞳。

「やったな刹那・・・これで・・・」

ニードラモンがそう言った直後、エアルモンに異変が起きるのだった。

「!？」

突然何処から出てきたのか炎が現れエアルモンはあっという間に炎に包まれていった。

いきなりの事で警戒し、炎に包まれたエアルモンから離れるニードラモンとオルガーモン。

「どないなってるんや・・・これも・・・あいつの技なんか？」

そう聞く瞳。

「いえ、エアルモンは風の力を操るデジモンのはず．．炎の力を扱えるならニードラモンと戦っている最中に使っているはず．．」

そう言うオルガモン。

「どういう事だ．．ニードラモン．．」

「わからない．．でも、何か嫌な．．」

と、その時炎に包まれたまま起き上がるエアルモン。

「ううつ．．．」

じつとニードラモンを睨みつけているエアルモン。

そして、エアルモンは一気に地を蹴りニードラモンに向かっていったのだった。

「エアルモンから離れる！ニードラモン」

とつさに炎に包まれたエアルモンから何かを感じた刹那はニードラモンにそう告げた。

エアルモンから離れるため飛び立つニードラモン。

突っ込んできたエアルモンの攻撃はかわすことが出来たニードラモンだが、纏っている炎の熱の影響を受けていた。

「くつ．．」

「大丈夫？刹那」

刹那を心配するニードラモン。

「俺の心配はするな・・・あいつを倒すことだけを考える！」

そう言う刹那。

と、空にいるニードラモンを狙うのを諦めたのかエアルモンは地上にいるオルガーマンに視線を向けた。

「今度はうちに挑戦やな・・・オルガーマン！」

「わかってる・・・迎え撃つ」

そう告げたオルガーマン。

オルガーマンに向かうエアルモンを空中から追うニードラモン。

「ニードスコール！」

エアルモンを止めようと針の雨を降らせるニードラモン。

だが、エアルモンの暴走に近い行動を止める事は出来なかった。

「ニードラモン！ニードリングスターズだ！」

そう指示する刹那。

「ダメだよ刹那・・・あれだけの炎に包まれているんだ・・・俺は大丈

夫だけど・・・刹那は耐えられない」

そう言うニードラモン。

「攻撃の準備しとってや」

と、突然刹那にそう告げた瞳なのであった。

「攻撃の準備・・・」

「せや！あの最強の体当たりや！あれならあいつ倒せる」

そう言う瞳。

「だが、今のエアルモンにはまともに触れるのも難しい・・・あの技は・・・」

ニードラモンがそう告げると

「せやから問題ないって・・・うちらが何とかするんやからな！」

と、エアルモンに立ち向かうオルガモン。

「では、いきましょう。瞳」

「オッケーや！」

瞳を乗せたままエアルモンに向かって駆け出していくオルガモン。

「一体どうするつもりだ・・・さっき使っていた技は炎の技・・・同じ

炎ではエアルモンには・・・」

そう言うニードラモン。

「攻撃準備だ、ニードラモン」

そう静かに呟く刹那。

そして、エアルモンもオルガーマンに向け一気に移動していた。

「オルガーマンが炎の技しか使えへんと思っとなら大間違いやで！オルガーマン！」

「我が凍てつく力・・・フリージングブラスト！！」

オルガーマンの口から放たれた強力な冷氣。

その冷氣は正面から向かってきていたエアルモンに直撃した。

「刹那・・・あれは・・・」

「なるほどな・・・あれなら倒せる」

強力な冷氣を受けたエアルモンは、纏っていた炎ごと氷に包まれていった。

「今や！刹那君！」

「ニードラモン！」

「ああ！ニードリングスターズ！！」

上空から一気に急降下し、凍って動けなくなったエアルモンの身体を貫くニードラモンなのであった。

「・・・」

エアルモンを撃破して地上へと降りてきたニードラモン。

そして、ニードラモンはすぐにチクモンへと退化した。

「お疲れ様やな」

そう言いながらやってきた瞳とオルトモン。

「別に俺は・・・」

そう告げた刹那は消滅したエアルモンのいた場所に何かが落ちているのを見つけた。

「これは・・・」

刹那が拾ったのはとても綺麗な赤い色をした宝石のような石だった。

「せやけど割れてるな・・・」

そう告げる瞳。

「そうだな・・・元々は丸い宝玉のようなものだったのだろうか・・・それが半分に割れてしまったのだろっ」

そう言うオルトモン。

「チクモン・・・何か感じるか？」

「よくわからないけど・・・ただの石じゃないみたいだよ」

そう答えるチクモン。

「エアルモンのあの変化・・・この石によるものなのか・・・」

そう考える刹那。

と、綺麗なその石をじつと見ている瞳。

「欲しいならくれてやる・・・別に俺は・・・」

「ウチはええよ。それはエアルモンが持ってた物みたいやし、それやったらエアルモン倒したんは刹那君やからそれ持つのは刹那君や」

そう言う瞳。

「・・・」

仕方なくその石をポケットに入れる刹那。

「ほな、これから一緒に頑張ろうな！」

元気よく言う瞳に対して、刹那は相変わらず一人で歩き出していくのであった。

ファイル9：ミルモン進化の謎（1）

刹那と瞳が出会い一緒に行動している頃。

隼人と未来は・・・。

「隼人君・・・」

何やら元気がない様子の隼人を心配する未来。

「元気がないのは隼人だけじゃないみたいね・・・ミルモンも」

そう言うピュアモン。

「どうしたのかな・・・」

「・・・前の戦いで上手く進化できなかったから・・・それが隼人にもミルモンにも心に影響を与えてるみたいね」

何かを感じるのかそう告げるピュアモン。

「ご免ね、隼人・・・ちゃんと進化出来たら危険なことにはならなかったのに」

そう謝るミルモン。

「ミルモンのせいじゃないよ・・・僕の思いが足りなかったんだ・・・多分・・・」

そう言う隼人。

「隼人君・・・元気出していこう！これから頑張れば大丈夫だし・・・ねっ」

そう励ます未来。

「ありがとう未来さん」

だが、その時突然動きを止めたミルモンとピュアモン。

「隼人！」

「未来、デジモンの気配よ・・・気をつけて」

そういわれ隼人と未来はデジヴァイスを手に取り辺りを見渡すのであった。

と、突然隼人達の前に姿を現した一体のデジモン。

それと同時に別のデジモンも二人の前に姿を見せた。

「二体の・・・デジモン」

そう呟く隼人。

「最初に出てきたのは・・・シャイニモン・・・後から来たのがブラッディモン・・・」

デジヴァイスで見た相手デジモンのデータを言う未来。

「隼人、シャイニモンの方怪我してるみたいだよ」

そう告げたミルモン。

「未来！あのブラッディモン、闇の力を宿してる・・・多分、シャイニモンはブラッディモンに・・・」

「ピュアモン！助けるよ」

と、輝く未来のデジヴァイス。

「ピュアモン進化！ハニーエンジェモン」

翼を羽ばたかせシャイニモンの前に出るハニーエンジェモン。

「貴様は・・・まさか・・・」

「シャイニングウイング！」

と、ブラッディモンに向けて放つ光のエネルギー。

「ちっ・・・ここは一旦引くか・・・」

そう告げるとブラッディモンは、この場から飛び去っていったのだった。

「未来さん、シャイニモンの手当てをしないと」

と、ハニーエンジェモンがピュアモンに戻り側に戻ってきた。

「未来、デジヴァイスを・・・シャイニモンに近づけて」

「えっ・・・こう？」

ピュアモンに言われた通りにやってみる未来。

と、デジヴァイスから淡い光が放たれるとシャイニモンの中に吸収されていった。

「あつ、傷が・・・」

全てではないがシャイニモンの傷が治っていった。

「すまない・・・君達は・・・」

「えっと・・・」

とりあえず状況を説明した隼人。

「人間か・・・かつて昔デジモンを連れた人間がデジタルワールドを救ったという伝説が残っているが・・・これがそうなのか・・・」

そう言うシャイニモン。

「でも、ピュアモン。デジヴァイスって治療することもできたの？」

ピュアモンに尋ねる隼人。

「デジヴァイスから放たれる光は同じ正しい心を持ったデジモンに

は治療効果があるの。ブラッディモンや前に戦ったデジモン達には何の意味もないんだけどね」

そう説明したピュアモン。

「それより、一体どうしたの？何で追われて・・・」

ミルモンが尋ねると

「最近になってブラッディモンのようなデジモンがあんな行動に出るようになっていのです」

そう告げたシャイニモンであった。

「僕達もそう言ったデジモンと戦ったんです」

そう言う隼人。

「何が原因があるかと思いついてたのだが・・・さっきのブラッディモンの攻撃を受けて・・・」

そう語るシャイニモン。

「未来さん、どうしよう・・・」

「協力しましょう・・・ブラッディモンに限らず暴れてるデジモンは何とかしないとこの世界が危ないんですよ」

そう言う未来。

「すまない・・・君たちに手伝ってもらうことになるとは・・・」

そう言うシャイニモン。

「よし、それならシャイニモンが完全に回復するまで待つて行動開始だね」

「うん、頑張ろう隼人」

そう言うミルモン。

その頃、退散したブラッディモンはというと・・・。

「シャイニモン・・・それとあいつらがあのお方が言っていたこの世界を救うべく現れた子供か・・・」

と、手に何か握っていたブラッディモン。

「やられてたまるか・・・俺がこのエリアで最強のデジモンになるんだ」

そう言うのと再び行動を開始するブラッディモンであった。

ファイル9：ミルモン進化の謎（2）

しばらく休んでいたので大分回復していたシャイニモン。

「ありがとう・・・もう動けるよ」

そう言い立ち上がるシャイニモン。

「それじゃ出発・・・」

隼人がそう言った時、漆黒の剣がシャイニモン貫いたのだった。

「!？」

驚く隼人達。

「隼人！あそこ！」

叫ぶミルモン。

と、そこには宙に漆黒の剣を浮かべていたブラッディモンがいたのだった。

「ブラッディモン・・・」

攻撃を受け倒れるシャイニモン。

「お前のようなデジモンはあの方の邪魔となる・・・消えてもらっ」

「シャイニモン・・・」

側による隼人。

「すまない・・・君達と共に戦うことは出来そうにない・・・」

「そんなことないわ。またデジヴァイスで」

シャイニモンにデジヴァイスを掲げる未来。

だが、傷が大きすぎるのかわずかししか回復できないデジヴァイスの光ではまるで効果がなかった。

「君達は・・・ここから早く・・・」

と、消えていくシャイニモンの身体。

「シャイニモン！」

そして、シャイニモンはデジタルワールドから消えていったのだった。

「シャイニモンー!!」

叫ぶ未来。

「次はお前たちだ・・・お前達を倒せば俺は・・・」

そう言うブラッディモン。

「許さないんだから！ピュアモン！」

と、強く輝くデジヴァイス。

「ピュアモン進化！ハニーエンジェモン」

再び進化したピュアモン。

「お前も聖なる力を持ったデジモンだったか・・・ならば、倒しておかないといけないな」

宙に浮かばせていた漆黒の剣を放つブラッディモン。

ハニーエンジェモンは空へ飛び上がり剣をかわした。

「それでかわしたつもりか！」

ブラッディモンが腕を振ると剣が軌道を変え、ハニーエンジェモンが移動した方へ向かっていった。

「シャイニングウイング」

追ってくる剣を粉碎するハニーエンジェモン。

「貴方の攻撃は効かないわ」

そう告げたハニーエンジェモン。

「そうか・・・なら、先にこちらを始末するだけだ！」

と、ブラッディモンは未来達に向けて漆黒の剣を放ったのであった。

「未来！」

叫ぶと共に未来達の方へ飛ぶハニーエンジェモン。

「ミルモン、進化を・・・」

ミルモンを進化させて迫る危機を乗り越えようと考えた隼人。

しかし、デジヴァイスに何の変化もなくミルモンも進化することはないかった。

「どうして・・・ミルモンだけ・・・」

そう呟く隼人。

そして、隼人達にブラッディモンの漆黒の剣が命中する寸前そこにハニーエンジェモンが入ってきたのだった。

「!?!」

そして、自らの身体に漆黒の剣を受けるハニーエンジェモン。

「ハニーエンジェモン！」

「みんな・・・無事みたいね」

そう告げるハニーエンジェモン。

「やっぱりそうくると思ってたぜ・・・その身体じゃこれからの俺の攻撃をよけきれないよな」

そう言うブラッディモン。

「ハニーエンジェモン・・・僕・・・」

「大丈夫・・・隼人もミルモンも必ず力が発揮される・・・それを信じて」

そう言いブラッディモンの方を向くハニーエンジェモン。

「まだやるか・・・ならお前もシャイニモンのように倒してやるよ」

そして、再び放たれる漆黒の剣。

「・・・ハニーエンジェモン・・・僕は・・・」

デジヴァイスを握り締める隼人。

ブラッディモンの攻撃をかわしていくハニーエンジェモンだが、前とは違い全てをかわせず確実にダメージを負ってしまっていた。

「隼人・・・隼人の思いをぶつけて・・・そうすれば力を発揮できると思うの」

そう告げるミルモン。

「・・・僕は・・・ハニーエンジェモンを助けて・・・ブラッディモンを倒したい！ミルモンと一緒に」

と、その時突如として隼人の持つデジヴァイスが輝きを放ち始めたのであった。

「この輝き・・・進化・・・」

そう呟く未来。

「ミルモン・・・もしかしてミラスモンに・・・」

そう言う隼人。

と、デジヴァイスのモニターに映し出された【Va】の文字。

「・・・この文字・・・ミラスモンに進化した時に出た文字と違う・・・」

すると、デジヴァイスからあふれた光に包まれていくミルモン。

「ミルモン進化！セントモン！」

白くまるで光のような身体を持つ大きな獣型へのデジモンへ進化したミルモン。

「セントモン・・・ミラスモンじゃない・・・」

驚いている隼人。

「僕にもわからないけど・・・前とは違う力に溢れてる」

そう告げるセントモン。

「未来・・・今のミルモン・・・私と同じ力が・・・宿っている」

そう言うハニーエンジェモン。

「それって・・・」

と、デジヴァイスでセントモンのデータを見る未来。

「セントモン・・・V a種・・・確かにハニーエンジェモンと同じだけど・・・ということ・・・」

「貴様も光の力を扱うデジモンだったか・・・なら、始末しておかないといけないな」

そう告げるとまた漆黒の剣を宙に出現させたブラッディモンなのであった。

ファイル9：ミルモン進化の謎（3）

「セントモン、攻撃が来る」

そう告げた隼人。

「わかってる。後は私に任せて」

そう言ったセントモン。

「俺の漆黒の剣でお前も消してやるよ」

そう言うブラッディモン。

「私は消されない。私には隼人からもらった思いの力があるから」

そう告げるセントモン。

「消えろ！」

そして、漆黒の剣を放つブラッディモン。

ブラッディモンの意思で動く漆黒の剣。

その動きを目で追っているセントモン。

「終わりだ！」

四方からセントモンに飛んでいく漆黒の剣。

「シャイニークロー！」

と、光り輝く爪で漆黒の剣を粉碎していったセントモン。

「何だと、後方の剣にまで反応して…」

「貴方の放った剣の数はちゃんと把握していますから。足りない分は私の死角に存在している…そう予測しただけです」

そう言うセントモン。

「なら、もっと数を増やしてお前を串刺しにしてくれる！」

先程より数を増やし、セントモンは漆黒の剣に囲まれた。

「逃げ場はない…そして、これだけの数の剣が一斉に襲い掛かれれば全てを粉碎する事はできまい」

そう言い放つブラッディモン。

「確かに貴方の言う通りね…」

「セントモン…」

心配する隼人。

「でもね、粉碎する必要はないわ。何故かという…」

と、身体全体から光を放つセントモン。

「!？」

驚くブラッディモン。

だが、その事より驚いたのは宙に浮いていた漆黒の剣が次々と地面に落下していたのだった。

「これは…どういうことだ」

「これが私の力…私の光で貴方の力を滅したのです」

そう告げると地を駆け出すセントモン。

「させるか!」

何度も漆黒の剣を出現させ放つブラッディモンだが、全てセントモンに触れる事無くその力を失っていた。

「馬鹿な…」

「これは消えていったシャイニモンの仇の一撃です」

と、最後の一步で一氣に加速したセントモン。

「ライトニングスマッシュ」

光の塊となったセントモンは、そのままブラッディモンにぶつかっていった。

「光のデジモンを消し続けた俺が…光のデジモンに…消されるとは…」

「この世界で起きている異変…貴方は何か知っているようですね」

光を止めそう聞いたセントモン。

「どうせお前達は消される運命だ…教えてやるよ。新生七大魔王デジモン達が動き出しているんだよ」

そう言ったブラッディモン。

「七大魔王って…」

そう呟く未来。

「いくらお前達が集まった所で…この世界の悪の根源を倒す事など不可能だ…」

そして、そのままブラッディモンはこの世界から消滅していったのであった。

ファイル10：七大魔王の存在（1）

「何とか倒せたね、ブラッディモン」

そう言う隼人。

と、セントモンはミルモンへと退化した。

同じくハニーエンジEMONもピュアモンに戻った。

「でも、隼人君。ブラッディモンが言ってた事…」

「七大魔王…未来さんも知ってるよね」

「ええ、でもブラッディモンが言ってたのは新生七大魔王って…」

そう言う未来。

「ゲームのデータと一つになったから…そう言うのまでデジモンに影響が出ちゃってるのかな」

そう考える隼人。

「隼人」

と、隼人を呼んでいるミルモン。

「どうしたの？ミルモン」

隼人はミルモンが呼んでいる場所へと向かった。

「何か落ちてたよ。多分、ブラッディモンが持ってたんじゃないかな」

ミルモンからその何かを受け取った隼人。

「赤い…宝石…」

じつとそれを見つめる隼人。

「何か良くわからないけど…持っておいたら隼人。何か必要な時があるかもしれないし」

そう告げた未来。

「うん…」

とりあえずポケットに宝石をしまう隼人。

「未来、これから先ブラッディモンより強いデジモンが襲ってくるかもしれない。七大魔王の存在も気になるから…隼人とミルモンも気をつけて」

そう言うピュアモン。

「なら早く他のこの世界に来ている仲間を見つけないといけないよね」

そう意気込む隼人なのであった。

その頃、この世界を歩いていた刹那。

その後ろからチクモン・瞳・オルトモンが続いていた。

「なあ、チクモン。何で刹那君はあんな感じなん？」

そう聞いてきた瞳。

「最初に会った時からだったけど…多分…」

隼人と未来との事がより刹那をあんな風にさせているのではないかとチクモンは考えていた。

そんな中、刹那達は遠くで多数の煙が上がっている場所を見つけた。

「刹那！あれ」

チクモンが驚いていると

「デジヴァイスには何の反応はないが」

「オルトモン！」

と、瞳はいきなりオルトモンをオルガーモンへ進化させた。

「お前、何を…」

「ほら、オルガーモンに乗っちゃって」

ほぼ強制的に刹那とチクモンを乗せる瞳。

「何勝手な事を…」

不機嫌そうな顔を見せながらそう言う刹那。

「あんなの見て放っとくわけないやろ…オルガーモン！」

「振り落とされないようにな」

そう告げると地を走っていくオルガーモン。

そして、そんなに時間もかからずに煙が上がっている場所へたどり着いたのだった。

ファイル10：七大魔王の存在（2）

「何や、これ…」

その場所の光景を見て瞳の最初の発言がそれであった。

「ここには…街があつたみたいだな」

辺りを見てそう感じる刹那。

「街って…ほとんど何もないやん…めちゃくちゃにされて」

オルガーマンから降り辺りを歩く瞳。

「俺達も行くぞ、チクモン」

「瞳、俺はどうすればいい？」

尋ねるオルガーマン。

すると、刹那が

「お前は退化せずにいろ。この街を破壊した奴が近くにいるかもしれないからな」

そう告げた。

しばらく歩き辺りを探索してみた刹那たちだったが、生き残っている者はいなかった。

「一体誰がやったんやろ…」

考える瞳。

「チクモン…何かわかるか？」

「この場にそのデジモンがいないからわからないけど…でも、短時間でこれだけの破壊をしたのなら相当強い力を持ったデジモンのはずだよ」

そう告げるチクモン。

「とりあえずこれ以上ここにいても危険なだけだな。瞳、すぐに離れた方が…」

そう言うオルガーマン。

「ちょっと待ってや。今、あの瓦礫の下…何か動いた」

それに気付いた瞳は言うと同時に駆け出していた。

「瞳！」

慌てて後を追うオルガーマン。

「生存者がいたのか…何か話が聞けるかもな」

と、言う事で刹那とチクモンもそこへ向かった。

「オルガーマン！この瓦礫を…」

「わかった！」

進化して強くなっている力で、瓦礫を弾き飛ばしたオルガーマン。

「大丈夫？しつかりしいや」

倒れているデジモンに手を貸す瞳。

「ううっ…」

苦しそうな表情を見せているデジモン。

「そんな状態の所悪いが、一体何があった？誰がこんな事をしました」

そう聞いた刹那。

「刹那君。今はそれより手当てを…」

そう言う瞳だが、刹那はそんな瞳を睨み付けていた。

「この街を破壊した奴らは俺達にとって元の世界に帰るために邪魔な存在になるかもしれないから…」

そう告げる刹那。

「よく…わからない…ただ、あいつは自分の事を新たなる支配者…ネオモン…」

「ネオモンか…どんな大きなデジモンだ…ここも結構広い街だというのに」

刹那がそう言う

「大きくなんか無い…君たちと…同じぐらい…ただ圧倒的な力でこの街を破壊して…」

「あんまり喋らんといてええよ。すぐに治療して…」

と、刹那はどこかへ歩き出していった。

「何処いくんや、刹那君」

「情報は得た…それに、そのデジモンは助けようとしても無駄だ…まともな治療道具もない状態でそのデジモンを救うのは不可能だ」

そう言う刹那。

「せやかて、見捨てるわけにはいかへんやろ」

そう告げる瞳。

「いいんです…もう、自分の命がもたない事はわかっています…でも、最後に…貴方達に会えて…良かった…」

そして、瞳に抱えられたままそのデジモンは消滅していったのだ。た。

「…」

無言の瞳。

「刹那、これからどうするつもりだ？この近くにそのネオモンがいるかもしれないんだろ」

そう言うオルガモン。

「すぐにここを離れる…出来る限りだ。俺の推測じゃネオモンは成熟期じゃおさまらない強さだ。今の俺達じゃ戦うだけ無駄だ」

そう告げた刹那。

「瞳…辛いのはわかるが…今は」

「大丈夫だよ…悪いのはネオモンや…ネオモン倒せばこの気持ちも…すっきりするから」

そう言いオルガモンに乗る瞳。

「刹那君！」

「二度と乗りたくはなかったが…ニードラモンで空を飛べば敵に見つかりやすいからな…仕方ないか」

そう考え刹那とチクモンも再びオルガモンに乗った。

「とりあえずどっちに進むんだ…」

「オルガーマンの感覚に任せるよ。デジモンの気配感知しながら突き進んでや」

そう言う瞳。

「わかった…行くぞ！」

そして、オルガーマンは再び全力で大地を駆け出していくのであった。

ファイル11：合流と闇デジモン（1）

刹那と瞳がまた動き出している頃、隼人と未来はというと…。

「とりあえず次の街でゆっくり休みましょ。ミルモンもピュアモンも戦いで疲れてるでしょ」

そう言う未来。

ブラッディモンとの戦いから次の街を目指して歩いている隼人たちが、ミルモンたちの様子を見ながらちよくちよくは休んでいた。

しかしながらやはりちゃんと回復させるには街で休むのが一番なのである。

そして、仲間の誰とも合流することなく隼人と未来達は見えてきた街の中へと入っていった。

「それじゃ食事にしましょうか…街なら少しは安心だしね」

と、言うことでこのわずかかもしれない平穏な時間で自分達のお腹を満たしていく隼人たち。

「ミルモン…」

「心配しないで隼人。隼人が強い思いを忘れなければ私はいつでも進化できる。そんな気がするの」

そう告げるミルモン。

だが、そんなわずかな平穏な時間はやはりわずかなものでしかなかった。

「!？」

突然何かを感じ反応するミルモンとピュアモン。

「ミルモン？」

「未来、この感じ…同じようで何か違う…」

そう言うピュアモン。

「それってどういう…」

と、その時街中で突如爆発が起き同時に煙も上がり始めていた。

「悪いデジモンが暴れているの？」

「うん…」

「ピュアモン、いきましよう」

そんな訳で、爆発のあった場所へと急ぐ隼人たち。

そして、そこでおきている光景を見て啞然となる隼人。

「何よあれ…」

暴れていた悪いデジモンは、近くのデジモンを捕まえると攻撃を放ちデジモンを粒子エネルギーに変えると自分の中に吸収していたのだった。

「あんなことするデジモン…見た事ないわよ」

そう言う未来。

と、隼人達に気付いたのか視線を向けるそのデジモン。

「ようやく俺の前に現れたか…デジモンを連れた人間…さぞかしいエネルギーなのだろうな」

そう言うそのデジモン。

「あのデジモンは…」

デジヴァイスを手に調べていく隼人。

「そんな機械に頼らなくても俺のことは教えてやる。俺はデザインモン…この辺りのエリアを統率している闇から生まれたデジモン」

そう告げたデザインモン。

「デザインモン…」

「気をつけて隼人！今まで戦ったデジモンと根本的に何か違う…同じ成熟期だけど何かが…」

そう言うミルモン。

「いくわよ、ピュアモン！」

「ピュアモン進化！ハニーエンジェモン」

ハニーエンジェモンへと進化するピュアモン。

「ミルモン…僕は負けないからミルモンと一緒になら！」

と、隼人のデジヴァイスに【Va】の文字が浮かび上がった。

「ミルモン進化！セントモン！」

そして、奇妙な力をもし出しているデザイアモンに向かっていくセントモンとハニーエンジェモンなのであった。

ファイル11：合流と闇デジモン（2）

同時に攻撃を仕掛けるセントモンとハニーエンジェモン。

「・・・」

と、それぞれ片腕でセントモン達の攻撃を受け止めたデザイアモン。

「セントモン達の攻撃が・・・」

「光の力を扱うデジモン・・・今まで俺が導いたデジモン達を倒してきたのは認めるが・・・俺の敵じゃない」

と、そのまま衝撃波を放ち二人を弾き飛ばしたデザイアモン。

「ハニーエンジェモン！私がデザイアモンを引き付けるから」

「わかったわ。気をつけて」

そう言うハニーエンジェモンは一旦デザイアモンから距離をとった。

「まずはお前か・・・セントモンだったな」

「今の私の姿ならパワーがある・・・本気で行けばデザイアモンだつて」

そう言うセントモン。

「勇ましいな・・・ならばその本気を見せてもらおうか」

そう告げると腕を構えるデザイアモン。

「隼人は離れていて：危険だから」

そう言うセントモン。

「うん・・・負けないで。セントモン」

そう告げると後ろへ下がる隼人。

「シャイニークロー！」

光の力を宿した爪を渾身の力で放つセントモン。

「さすが獣型：後ろ足をバネにして攻撃力にその飛び出しの勢いを
プラスさせている・・・だが」

と、デザイアモンは天に腕を掲げた。

「デスデロイトクロー」

漆黒のエネルギーをまとったデザイアモンの一撃が、セントモンの
攻撃とぶつかり合った。

「セントモン・・・」

「ハニーエンジェモン・・・どんな状況になってるの」

そう聞く未来。

「互角・・・光の力を持つセントモンが押していけるはずだけど・・・デザイアモンの闇の力が強くて・・・」

そう言うハニーエンジェモン。

「互角か・・・それは少々結論を出すのが早いな」

と、突然セントモンの目の前に大きな漆黒の手が出現した。

「なっ!?!」

そして、その手の一撃を受けて大きく弾き飛ばされてしまったセントモン。

「俺の技は物理よりエネルギー系寄りの攻撃だ・・・本来の攻撃はさっきお前が受けた奴だよ」

そう告げるデザイアモン。

「今の何なの...」

そう思う未来。

「私のシャイニングウイングみたいにエネルギーを相手に向けて放つタイプ・・・でも、あんな手の形なんて」

ハニーエンジェモンがそう言うと

「一応教えておいてやる。さっきの漆黒の手は俺の意思で自在に動かせる。俺の戦闘範囲は遠距離も含まれているわけだ」

そう告げるデザイアモン。

「セントモン、大丈夫」

倒れているセントモンに声をかける隼人。

「うん……でも、これじゃハニーエンジェモンと一緒に戦っても勝ち目が……デザイアモンは……完全体なみに強い……」

そう言うセントモン。

「もう少し遊んでやりたいんだが……お前らみたいなのを存在させておくと後々厄介になるから……きつちりここで終わらせるぜ」

と、両腕に先程の漆黒のエネルギーを集めるデザイアモン。

「セントモン……ここは私が食い止めるから貴方は隼人と未来を連れて……」

「ダメだよ……私達は仲間……誰かを犠牲にして逃げるなんて出来ない」

そう言い立ち上がるセントモン。

「心配いらないぜ。お前等はまとめて始末するからな……それじゃ一瞬で終わるから……少しぐらいの痛みは我慢するんだな」

そう言うとデザイアモンは、セントモン・ハニーエンジンモンに向けて漆黒の両手を放つのであった。

ファイル11：合流と闇デジモン（3）

セントモン・ハニーエンジェモンに向かう漆黒の両手。

だが、その時上空と地上から何かが跳んできてこの漆黒の両手を粉碎したのだった。

「何、今の…」

「今の攻撃は…」

そう言い隼人と未来は攻撃が飛んできた方を見た。

「どや！オルガーマンの攻撃は！」

そう告げた瞳。

「やはりな…いたのは未来と…隼人か」

そう呟く刹那。

「とりあえず地上の降りるよ。刹那」

刹那にそう言うと言動を下げ地上に降り立ったニードラモン。

「刹那さん！？…と、誰だろう。あの女の子」

そう言う隼人。

「刹那！」

「俺たちに注目している暇があったら敵を見てろ！次が来るぞ！」
そう告げる刹那。

と、今度は四つの腕がセントモンたちに向かって放たれていた。

「飛べ！ニードラモン」

すぐさま空中に飛ぶニードラモン。

だが、逃がさないように漆黒の腕は空中でも追いかけてきていた。

「オルガーモン！あの二人をひろって走るんや」

「わかった、瞳」

と、隼人たちの前まで駆け出すオルガーモン。

「えっと…」

瞳とオルガーモンを見て驚いている隼人。

「早く乗るんや」

迫る漆黒の腕を確認しながら、隼人と未来が背中に乗るのを確認するとオルガーモンはすぐにその場を離脱した。

「何とか頑張つて、ハニーエンジェモン」

「セントモン！光の力を持つセントモンならあいつを倒せるんだ」

そう言う未来と隼人。

「あいつのデジモン…進化できるようになっていたのか…」

そう呟く刹那。

「だから彼等だって仲間って事だよ、刹那」

そう言うニードラモン。

「私も手伝います」

と、ハニーエンジェモン・セントモンは光の力を放ち漆黒の腕を止めようとした。

「確かに相性は悪いが…この腕は自在に操れる」

すると、オルガモン・ニードラモンを追っていた腕がセントモン達の方へと向かっていった。

「ハニーエンジェモン！後ろ！」

そう叫ぶ未来。

だが、それも間に合わず後方から攻撃を受け倒れるセントモンとハニーエンジェモン。

そして、力を失いミルモンとピュアモンに戻ってしまった。

「ミルモン！」

「ゴメン、隼人…私達が…頑張らないといけないのに…」

そう言うミルモン。

「まずはお前からとどめだ！」

と、倒れているピュアモンに漆黒の腕を放つデザイアモン。

「ニードラモン！」

「ダメ…攻撃が間に合わない」

そう告げるニードラモン。

「…だったら…あれなら…お願いデジヴァイス！ミルモンに力を！」

隼人がそう言うのと輝きだすデジヴァイス。

「ミルモン進化、ミラスモン」

「何や、別のデジモンに進化した…」

「何だと…別形態に進化…」

驚いている瞳と刹那。

「ミラスモン！」

と、ミラスモンはピュアモンの前に立ち自分が装備しているミラーを使い漆黒の腕を受け止めると跳ね返した。

「やった！」

「甘いな…」

デザイアモンはそう告げるともう一つ漆黒の腕を放ち、跳ね返された攻撃を相殺させたのであった。

ファイル12：更なる進化（1）

「デザイアモンか・・・攻撃スピードは速いな」

デジヴァイスを見ながらそう告げる刹那。

「同じ進化レベルといえどもお前たち四体で挑んできても勝つ自信はある・・・だが、すでにお前達は三体・・・この戦いはお前達の完全敗北で終わる」

そう言うデザイアモン。

「私がいる限り仲間たちへの攻撃は通さない」

そう告げるミラスモン。

「刹那君！あのデジモンが防御してくれてる間にこちらであいつを倒すんや」

そう言う瞳。

「そうしたいのは山々だが・・・」

ニードラモンに乗っている刹那は、空中から未来の様子を見ていた。

「刹那・・・俺も覚悟は出来てる。いつでも指示を・・・」

そう言うニードラモン。

「・・・わかった」

そう答えた刹那。

「オルガーマン！刹那君が動いたらうちらも全力で行くで」

「了解だ、瞳」

そう言うオルガーマン。

「次は目障りなその二体を潰す！」

と、複数出現した漆黒の腕がオルガーマンとニードラモンに向かっていった。

「させない！ミラースマジック！」

再び動き出すミラーが漆黒の腕を防御していく。

「だからお前は甘い・・・所詮お前はただの壁役で終わる」

と、突然大地の中から漆黒の腕が出現しミラスモンの態勢を崩したのだった。

「ミラスモン！」

叫ぶ隼人。

「終わりだ」

「!？」

そして、次の瞬間防御も脆くなったところに全ての漆黒の腕がミラスモンに直撃していった。

「あつ・・・」

驚く瞳。

そして、ミラスモンはミルモンに退化しその場に倒れるのであった。

「ミルモン！」

駆け寄る隼人。

「ダメ、隼人・・・デザイアモンに捕まったら・・・だから逃げて・・・」

そう言うミルモン。

「どないするんや・・・あんなに簡単にやられてもうてる・・・」

「いくら防御に優れていそうなああのミラスモンというデジモンでも態勢を崩されあれだけの攻撃を受ければ・・・」

そう言うオルガモン。

「刹那・・・俺たちは・・・」

「あいつ・・・密かに地下に漆黒の腕を通していたのか・・・だと

すると大地も含めた全てのフィールドがあいつの攻撃範囲・・・ま
ずいな」

そう言う刹那。

「とりあえずお前達のデジモンさえ始末すれば恐いものはないと言
われていたが・・・弱ったこいつ等よりも残りの二体を先に潰す」

そう言いニードラモン達を見るデザイアモン。

「来るで」

そう告げる瞳。

そして、攻撃を放つデザイアモン。

迎え撃つため行動を開始するニードラモンとオルガモン。

「隼人君・・・私達どうしたらいいの・・・」

そう呟く未来。

だが、この時誰も気付いてはいなかった。

僅かながら隼人のデジヴァイスが鳴動していたことに・・・。

そして・・・。

ファイル12：更なる進化（2）

「ミルモン…ピュアモン…」

と、隼人は自分のデジヴァイスを手にとると握り締めた。

そんな中、デザイアモンとの激闘が続いているニードラモンとオルガモン。

「それにしてもあいつタフすぎやないんか」

そう言う瞳。

「確かに今までのデジモンとは違うな…二対一とはいえ…少し厳しいか」

そう判断する刹那。

「僕は許さない…デザイアモンを…僕の好きなデジタルワールドやデジモンを傷つける悪いデジモンを…許さない」

デジヴァイスを握る手に力を込める隼人。

と、僅かしか鳴動していなかったデジヴァイスの鳴動が大きくなり光を放ち始めた。

「えっ…」

驚く隼人と未来。

「あいつ…まだ何か…」

ニードラモンの背中から隼人の様子を見ていた刹那。

「もしかして…ミルモンに新しい力を…だったら…お願い！デザインアモンを倒せる力を！ミルモンに！」

そう言いデジヴァイスを掲げる隼人。

その瞬間、デジヴァイスのモニターに映し出される【V.i】の文字。

「力が流れ込んでくる…隼人の思いと一緒に…」

そして、光に包まれるミルモン。

「…っ!？」

と、その異変に気付いたのかデザイアモンがニードラモン達への攻撃を止めた。

「あのデジモン…他のデジモンとは違う感じを最初から見せていたがどうやらまだ終わっていなかったようだな」

そう言うデザイアモン。

「どないなるんや…刹那君」

尋ねる瞳。

「さあな…ただ…俺が見る限り隼人のデジモンはチクモン達とは何か違うことしかわからない」

そう答える刹那。

「ミルモン進化！デミルモン！」

光が消え姿を見せた新たなミルモンの姿は、ミラスモンのように人型の様だった。

だが、違う所は黒に近い軽防具を装備していてまるで騎士のような感じだった。

「デミルモン…あいつを…」

隼人がそう言うと

「黙ってる…俺があいつを倒すんだからな」

と、デミルモンは腰に装備していた剣・ナイツソードを抜き構えた。

「面白い…お前からは俺に近い力を感じる…敵として戦うのは残念だが…」

だが、次の瞬間デザイアモンの左腕にデミルモンの剣が突き刺さっていたのだった。

「ジェットナイフ…俺の剣は小型だが…こうやって投げナイフのよ
うに使えるんだよ。速すぎて見えなかったか？」

そう言うデミルモン。

「貴様！」

一気に複数の漆黒の腕を出現させ、全てをデミルモンに向けて放つデザイアモン。

「お前の武器は今ここにある…どうやってこれを…!？」

「何か言ったか？」

いつの間にかデミルモンの手にはナイツソードが握られていた。

しかし、先ほどデザイアモンに放たれたナイツソードはいまだ左腕に刺さったままだった。

「教えておくとナイツソードはいくらでも出せるんで…そして、お前は終わりだよ」

その場から動くことなくナイツソードを高速で投げ放っていくデミルモン。

「何故、通用しない…」

「何や…物凄いデジモンやな…あれがさっきまでの可愛いデジモンなんか…」

驚いている瞳。

「ウイルス種…ニードラモンと同じ…それにあの強さは…」

そう言う刹那。

「凄いデミルモン…デザイアモンを圧倒してる」

驚きながらそう言う隼人。

「ジェットナイフ」

そして、最後の漆黒の腕を破壊したデミルモン。

「グッ…だが、俺の漆黒の腕も何度でも…」

「終わりだよ…周りが見えていないお前はな」

「何！」

デミルモンに言われ辺りを見渡したデザイアモンは啞然とした。

先ほどから漆黒の腕を破壊していた幾つものデミルモンのナイツソードが宙に浮いていたのだ。

「終幕だな。ジェットナイフ・インフィニティ」

宙に浮いていた複数のナイツソードは、そこから高速で動きデザイアモンを一気に切り裂いていった。

「馬鹿な…」

そして、大ダメージを受けたデザイアモンはその場に倒れるのである。

つ
た。

ファイル13：終わらない戦い（1）

「やった、デザイアモンを・・・」

そう言う隼人。

「あいつのデジモン・・・謎が多いが・・・とりあえずはよしとするか」

そう考える刹那。

「ピュアモン・・・隼人君とミルモンが勝ってくれたよ」

ピュアモンを抱きかかえてそう言う未来。

「お疲れ様や！隼人君」

と、一番早く隼人の下に駆け寄った瞳。

「僕はそんなに何も・・・戦ってくれたミルモンじゃなくてデミルモンが・・・」

そう言いながらデミルモンを見る隼人。

だが、デミルモンはただじっと倒れているデザイアモンを見ていたのだった。

「デミルモン？」

「お前等・・・何も感じないのか？」

そう聞いてきたデミルモン。

「それは俺やピュアモンに言っているのか？」

そう尋ねるオルガーモン。

「あたり前だ。この不快になるような気配・・・まだ何かある」

そう告げたデミルモン。

『さすがデザイアモンを倒しただけはありますね』

そんな声が聞こえてくると同時に、倒れたデザイアモンの横の空間が捻れそこに新たなデジモンが姿を見せたのだった。

「あいつは・・・」

地上に戻ってきたニードラモンから降りた刹那がそう呟いた。

「貴方の強さを評価に値するものとして・・・私の自己紹介をしておこうか・・・私は真・七大魔王デジモンの一人・・・ブラックナイトモンだ。覚えておいてくれ」

ブラックナイトモンの発言に驚く隼人たち。

「七大魔王！？」

「せっかくデザイアモン倒したのに・・・こんなの・・・」

そう言い座り込む未来。

「心配しなくても今の私はお前達に手出しできない・・・お前達が見ているこの姿は実体では無いからな」

そう告げたブラックナイトモン。

「どういう意味だ？」

尋ねる刹那。

「私たち七大魔王がいる世界はデジタルワールドの中にあっても更なる異空間内にある・・・そして、私達が力を発揮出来るのはその特別な異空間内だけなのだ。そして、表にでてきたとしても姿は幻と同じ・・・」

「それじゃ何で出てきたんや」

そう言う瞳。

「そうだった・・・目的があつたからだよ」

と、倒れているデザイアモンを見るブラックナイトモン。

「グウツ・・・ブラックナイトモン様・・・」

「安心しろ・・・お前にはまだ動いてもらわないといけなからな」

と、そんな時突然デミルモンがブラックナイトモンに向かって駆け

出していったのだった。

ファイル13：終わらない戦い（2）

「デミルモン!?」

驚く隼人。

「何をしようとしているか知らないがその前に潰す!」

一気に距離を詰めていくデミルモン。

「しかし、残念だな…」

直接ブラックナイトモンを攻撃するデミルモンだが、その攻撃は空振りそのまま通り抜けてしまった。

「!?!」

「説明したと思うが今のこの姿は幻と同じ…お前達に干渉は出来ぬがお前達からも干渉は受けない」

そう告げるブラックナイトモン。

「なら!この死にぞこないを消すだけだ!」

倒れているデザイアモンに攻撃を放つデミルモン。

「しかし…同じ力を持つ我が部下にだけは…力を与える…と、言うことが可能なのだよ」

と、エネルギーの球体をデザイアモンに放ったブラックナイトモン。

「グッ……」

その瞬間、エネルギーの波動が放たれ近くにいたデミルモンは吹き飛ばされた。

「何や、何が起きてるんや」

そう告げる瞳。

「これでこちらの用事は終わった。さて、君たちの真の實力がどれほどか…見させてもらおうか」

そう告げるブラックナイトモン。

すると、デザイアモンはエネルギーの波に包まれその姿を変えていった。

「これって……」

そう呟く隼人。

「まずいな…ニードラモン！デザイアモンにとどめだ！」

そう叫んだ刹那。

「何やようわからへんけど、オルガモン！」

刹那と瞳の指示を受け、行動を起こすニードラモンとオルガモン。

「俺は…デザイアモンではない…」

すると、エネルギーの波の中から無数の漆黒の鞭がニードラモンとオルガーマンに襲い掛かった。

「かわせ！ニードラモン」

咄嗟に空高くに飛び上がり、漆黒の鞭を回避したニードラモン。

しかし、地上を駆けていたオルガーマンはこの鞭に捕らえられていた。

「オルガーマン！」

そして、エネルギーの波がなくなりその姿を見せるデザイアモンから変化したデジモン。

「俺はハイドデザイアモン…もはやお前達など敵ではない」

そう告げたハイドデザイアモン。

「未来さん…あれってもしかして」

隼人がそう言うと

「間違いないわ…進化…完全体に…」

そう告げる未来。

「グウッ…」

漆黒の鞭に捕まっていたオルガーモンは、次々と連続攻撃を受けオルトモンに退化してしまった。

「これで残りは二匹…もはや諦めろ」

そう言い放つハイドデザイアモン。

と、刹那はニードラモンと共に隼人・デミルモンの元にやってきた。

「刹那…さん…」

「残ったのがお前とはな…」

そう言う刹那。

「お願いします、刹那さん。戦い方を指示してください。僕じゃ足手まといになっちゃうから」

そう告げる隼人。

と、その時

「情けないな…俺のパートナーだって言うのにがっかりだぜ」

そういったデミルモン。

「今までならお前をあてにして戦おうとは思わなかったが…少し興味が出た…そして、一つ確認したい…。あいつを倒す意思はあるか」

「？」

そう聞いた刹那。

「あります！未来さん達を守れるのは僕たちしかないから」

そう言った隼人。

すると、その直後二人のポケットの中から突然赤い光が溢れ始めたのであった。

ファイル14：燃え盛る炎の戦士（1）

「この光・・・」

「・・・」

二人はポケットからその光る何かを取り出した。

「あれは…あの時のや…」

そう呟く瞳。

「お前も持っていたのか…しかしこの輝きは…」

そして、この輝きに反応するようにデジヴァイスのモニターも光が現れていた。

「刹那、この輝きが何かわからないけれど…デジヴァイスも反応している…もしかしたら…」

そう言うニードラモン。

「おい、お前等…敵を前にして何をやってるんだ」

そう告げるデミルモン。

「しかし、あの輝き嫌な予感がしますね…」

そう呟くブラックナイトモン。

「何をするか知らないが、デジモンを倒してしまえば何も出来ない
だろ！」

と、襲い掛かってくるハイドデザイアモン。

「刹那さん！これが何かわからないけど…きっと僕たちの力になっ
てくれる」

そう言う隼人。

「何処にそんな根拠があるかわからない発言だが…今のニードラモ
ンにもデミルモンにもあいつを倒せる力はない…確信はないがやっ
てみるしかないか…覚悟を決める！隼人」

「うん！未来さん達を守るんだ…」

と、その時大きく輝いた二つのクリスタル。

すると、そのクリスタルは互いのデジヴァイスの中に吸い込まれて
いった。

「えっ、デジヴァイスに…」

そして、デジヴァイスから光が溢れデミルモンとニードラモンを包
み込んだのだった。

『デミルモン、ニードラモン！クリスタルエボリューション』

光に包まれた二体のデジモンは、光と共に一つになっていった。

「デミルモンが…」

「確かこれってジョグレス進化…だったよね…」

そう呟く未来。

そして、光が徐々に消え始めるとそこには見たことのないデジモンが立っていた。

「ニードラモンでもデミルモンでもないデジモン…」

そう言う刹那。

「お前、何者だ」

そう告げるハイドデザイアモン。

「炎のクリスタルの力を纏いしデジモン、フレイザモン」

そう言ったフレイザモン。

「フレイザモン…私も知らないデジモンですね…と、言うよりも人間のパートナーとなったデジモンがあのかのクリスタルの力で一つになり進化を…」

そう呟くブラックナイトモン。

「未来さんやったな…あのデジモンのデータわかるん？」

「う、うん…フレイザモン…ウイルス種のデジモン…完全体…ハイ
ドデザイアモンと同じ完全体…」

「隼人…刹那…下がっていてほしい…本気で戦うから…隼
人たちを巻き込みたくない」

そう告げたフレイザモン。

「うん、頑張つて…フレイザモン」

フレイザモンに思いを託し後ろに下がる隼人。

「とりあえず観察させてもらう…これからこの世界での行動
に役に立てるだろうからな」

そう呟く刹那なのであった。

ファイル14：燃え盛る炎の戦士（2）

「どんなデジモンであろうとこの俺に勝てる奴などいない！」

そう言い放つと、ハイドデザイアモンはフレイザモンに向かっていった。

「渾身の闇の一撃を受けてみる！」

前進している勢いも力に変えて、フレイザモンに闇の力をまとった拳を放つハイドデザイアモン。

だが、フレイザモンは右手を前に出すと掌でハイドデザイアモンの拳を受け止めた。

「止められるものか！」

攻撃を受け止めたフレイザモンは、その勢いに負けてか後ろに押され始めていた。

「フレイザモン！」

心配そうに戦いを見守っている隼人。

「この程度じゃないはずだな、フレイザモン」

冷静にこの戦いをみている刹那。

と、フレイザモンは身体から炎を発すると後方に噴出させた。

「な、何だと」

すると、押されていたフレイザモンはその場に留まり逆に押し返し始めた。

「お前の闇はその程度か？」

「なっ!？」

そして、掌からも炎を噴出させるとそのままハイドデザイアモンを弾き飛ばしたフレイザモン。

「こんな・・・バカな・・・俺はブラックナイトモン様に力を頂いたのだ・・・この俺が・・・」

「これで終わらせてやる」

と、噴出させた炎に包まれていくフレイザモン。

「ならば、攻撃する前に俺の最大の闇の・・・」

そう言うハイドデザイアモンだったが

「もう手遅れだ・・・バーニングブレスト!!」

自身を包んでいた炎の全てをハイドデザイアモンに放ったフレイザモン。

「!？」

そして、その技を受けたハイドデザイアモン。

「ブラックナイトモン様・・・俺に・・・もっと力を・・・」

ただ、戦いを見ていたブラックナイトモンに助けを求めるハイドデザイアモン。

「闇のデジモンは常に強くなければならない。だがお前の心はすでに奴に碎かれた・・・最後は闇のデジモンの誇りを持ち散れ」

そう言い放ったブラックナイトモン。

「ブラックナイトモン様!!」

そして、ハイドデザイアモンは強力な炎に包まれたままこの場から消滅したのであった。

ファイル15：集う最強のデジモン

戦いが終わり、フレイザモンはそれぞれ見たことのないデジモンに退化した。

「えっ……」

驚いている隼人。

「お前まさか……」

そう告げた刹那。

「俺はプツモン、チクモンの幼年期の姿だぜ」

そういうプツモン。

「それじゃ君はミルモンの」

隼人がそういうと

「私はルルモン。さっきの進化で力を大きく使っちゃったから幼年期にまで退化しちゃったみたい」

そう説明するルルモン。

「でも、とりあえずは何とかなったな」

そう言う瞳。

「まだ終わっていない!」

そう強く言つと姿を残しているブラックナイトモンの方を見た刹那。

「前にも説明したが我らはデジタルワールドではお前達に手は出せない・・・いつか戦える日を楽しみにしている・・・それまでもっと強くなれ!」

そう言い放つとその場から消えてしまったブラックナイトモン。

「消えちゃった・・・」

「すぐに場所を移動するぞ。今の状況では敵のデジモンどころか野生のデジモンに襲われたってまともに戦えない。休めて姿を隠せる場所に」

と、言う刹那の提案で隼人達は足早にこの場を立ち去るのであった。

その頃、デジタルワールドとは別の次元にある闇の空間。

そこに、ブラックナイトモンの姿があった。

「部下が負けたというのに嬉しそうですわね・・・ブラックナイトモン」

暗闇の中に僅かな顔の輪郭だけを映して姿を見せたデジモン。

「レディバモンか・・・奴等は強くなる。俺は奴等といづれ全力で戦う日が来るだろう」

そう告げるブラックナイトモン。

「そんなことでこの七大魔王と言う力の集まりが崩れるのはやめてほしいものですわよ」

そう言うレディバモン。

「その時はその時だ」

「でも、貴方の出番は当分ありませんわよ。選ばれし子供達のこれから行くであろう先は私の管轄している一帯のエリア・・・手出しは無用ですわよ」

そう言い放つレディバモン。

「それが約束だったからな・・・しかし、七大魔王も奴等に興味はないのか集まりが悪いな」

「感覚が鈍くなったのでは？他の五つの力はそれぞれこの空間の奥で密かに機会を待っていますのよ。自分のエリアに連中がやってくればすぐに狩れるように・・・もっとも七大魔王同士でよく話すのも私と貴方ぐらいですが・・・」

そう言うレディバモン。

「他の奴等は馴れ合わないからな・・・では、今度は君のやり方を見せてもらおうか・・・」

「いいですわ。私の軍は甘くないことを選ばれし子供達に教えてあ

げませんとね
「

そう告げると暗闇の中に消えていったレディバモンなのであった。

ファイル16：これから行く道

前回、大変な戦いを乗り越えた隼人達。

その後、ゆっくり休めそうな洞穴を見つけそこでしばらく疲れを癒していた。

そんな中、じっと洞穴の入り口に座って外を見ていた刹那。

「ずっと見張りしとつたら、身体が癒されへんよ」

そう言ってやってきた瞳。

「別にいい。今はチクモンも幼年期になってすぐには戦えない状態だ。今はお前と未来に頼むしかないからな・・・だからお前はゆっくり休んでいろ」

そう告げた刹那。

「やっぱり刹那君って優しいんやな」

そう言う瞳。

「俺や瞳はゆっくり休んだ。瞳が言いたいのはお前も休めと言つことだ」

と、瞳の隣に現れたオルトモン。

「一時間だ・・・一時間後また俺が見張りに出る」

そう言つと奥へと下がっていった刹那。

「本当は疲れとるはずやのにな」

「では、瞳・・・見張りは主に俺がやる。瞳は軽く休みながら・・・」

「うん、ええよ」

笑顔で見張りをやる瞳なのであつた。

「刹那、無茶しないでよ」

奥に戻つてきた刹那にそう言つ未来。

「瞳には休めと言われたが・・・丁度いいからなこれからのことについて話す」

そう告げた刹那。

「本当に休まなくていいの？」

そう聞く隼人。

「それはお前のデジモンも同じだろう・・・それに直接戦うことがまだ無いにしろ七大魔王の存在もある・・・この先のエリアは更に別のエリアだ・・・他の七大魔王が仕掛けてくるだろうからな」

そう考える刹那。

「先には進むしかないんだけど具体的にはどうするの?」

尋ねる未来。

「残りの仲間をさがす。まだ、広大なこのデジタルワールドの中にうまく敵から逃れながら生きているはずだ」

「そうだね・・・僕も一人の時より刹那さん達と一緒にの方が安心だから」

そう言う隼人。

「もうしばらくここに留まる。その後、仲間をさがしに向かう」

そう言う刹那。

「でも、刹那が仲間と一緒に行動するって自分から言うなんてちょっと驚きかな」

そう言う未来。

「刹那はあのハイドデザインモンや実体はなかったけどブラックナイトモンを間近に見て一人じゃ無理って感じたんじゃないかしら」

そう言うピュアモン。

「理由なんてどうでもいいだろ。俺は確実にここを出られるやり方を選んだだけだ」

真剣な表情でそう告げる刹那なのであった。

ファイル17：孤高の戦士

隼人達が次の行動のためにその身体を癒している頃……。

隼人達がいるエリアから幾つかのエリアの先に、一人の青年と一体のデジモンが静かに歩いていた。

「ツノドラモン、気配の方はどうなった？」

そう聞いてきた青年。

「少し前から感じられていた邪悪な気配が消えたよ、ワタル」

そう説明するツノドラモン。

「そうか……。どうやら俺がまだ出会っていない選ばれし子供達も無事にこの世界の戦いを耐え抜いているようだな」

そう告げるワタル。

「でも、この世界の冒険に不慣れだしそろそろ危ないと思うよ」

ツノドラモンがそう言うと

「わかっている。だからこそ、今そっちに向かっているんだからな・
・デジヴァイスの反応に導かれてな」

そう言いデジヴァイスのモニターを見るワタル。

と、その時上空から一体のデジモンがワタルとツノドラモンめがけて急降下してきていた。

「ワタル・・・あいつ・・・」

「プテロモン・・・空中から獲物を狙うことを得意とする成熟期のデジモンか・・・問題ないなツノドラモン」

「ああ、任せてよ」

と、襲いかかってくるプテロモンに視線を向けるツノドラモン。

と、頭に生えた一本の角が光りだした。

「クリティカルホーン！」

それはほんのわずかな時間だった。

ツノドラモンは自身の必殺技を、プテロモンの急所に的確にヒットさせていた。

「俺のパートナーは並の強さじゃない。例え進化レベルが一段階離れていても問題なく戦える。それが・・・」

そう言いながら勝利したツノドラモンを見るワタル。

「でも、やっぱり野生のデジモンも何だか凶暴化してるね・・・これも・・・」

「そうだな・・・この世界をエリアごとに管理し、支配しようとし

ている新たな七大魔王・・・いつの日か直接俺たちが戦う日が来る・・・だからこそ・・・」

と、いつの間にか次のエリアとの境に到着していたワタルとツノドラモン。

「また一つ・・・見知らぬ仲間との距離が縮まったな」

「さあ、行こう。ワタル！」

そして、元気よく次のエリアへの一步を踏み出していくワタルとツノドラモンなのであった。

ファイル18：出会い（1）

「せめて成長期に進化してくれれば安心なんだがな」

そう告げたのは刹那だった。

「進化にはデジモン達の体調とタイマーとなる未来達の思いが必要なの。成長期に進化するのも成熟期に進化するのも同じだよ」

そう言うピュアモン。

「体調の方はばっちりだからミルモンに進化してもいいんだけど・・
・僕の心のせいなのかな」

そう言う隼人。

「今日もこっちはいい天気やな」

外を少し見ながらそう言う瞳。

「瞳も昨日は見張りをやったんだ、今は少し休んだ方が・・・」

そう言うオルトモンだが

「何言うとるんや。今日の分の食料見つけへんとあかんやろ。何かあってもオルガーモンに進化すれば逃げられるしな」

そう言う瞳。

「隼人、お前もついていけ。オルガーモンなら二人ぐらい問題なく乗れるだろ」

そう言う刹那。

「そう言うんやったら刹那君と一緒に来たらええんとちゃうん？」

そう聞いてきた瞳。

「この場を隼人と未来だけにしておくのは心配だからな・・・」

「はは・・・」

苦笑いする隼人。

と、ルルモンを腕に抱く隼人。

「瞳さんを守るって言うより守られちゃうかもしれないけどよろしく」

そう言う隼人。

「大丈夫だよ。ほな、早速行こか」

そんな訳で、隼人達はこの場を出て食料を探しに行くのであった。

「刹那、さっきあんな言い方しなくったって」

そう言う未来。

「刹那は未来のことが本当に心配なんだよ」

そう言うプツモン。

「当然だ・・・俺達は兄妹なんだからな」

そう告げる刹那なのであった。

そして、こちららうまく食料を集めていた隼人達。

「周りは大丈夫なん？オルトモン」

「ああ、特に嫌な気配は感じない・・・ん？」

と、木々が生い茂っている方を見るオルトモン。

と、そこには多数の野生のデジモン達がこちらの様子を伺っていた。

「もしかして、ここってあのデジモン達の縄張りとかやったんかな」

「そうみたいね・・・とりあえず食料は集まったし早めに戻ろう、隼人」

そう告げるルルモン。

だが、突如野生デジモンの中のリーダーらしき一体が隼人達に向かって襲いかかってきたのであった。

ファイル18：出会い（2）

「オルトモン！」

思わず叫んでいた瞳。

「オルトモン進化！オルガーモン」

すぐさま成熟期へと進化したオルトモン。

「隼人君！」

襲いかかってくるデジモンより早く、仲間を背中に乗せて駆け出すオルガーモン。

だが、いつの間にか周囲にはその野生デジモン達が集まっており逃げ出すことが出来なくなっていた。

「瞳、強行突破は瞳達が危険になる。ここは、このデジモン達を蹴散らして……」

そう言うオルガーモン。

「そんなのアカン。このデジモン達は悪いデジモンやないんや。せやから……」

そう言う瞳。

「でも、この状況……抜け出せそうにないよ」

そう言う隼人。

そうこうしている間にも、野生デジモン達はゆっくりと囲んでいる範囲を狭めていた。

「せめて私が成熟期になれば・・・」

そう言うルルモン。

「ルルモン・・・」

そして、リーダーらしきデジモンが叫びを上げると周りのデジモン達が一斉に襲いかかってきた。

「すまない瞳。俺は瞳達を守るために・・・」

身体中に力を込めるオルガモン。

だが、その時空中から一匹のデジモンが飛び込んできてこの場に降りた。

「えっ・・・」

驚く一同。

「じつとしていいよ。後は俺とワタルが解決するから」

そう告げたそのデジモン。

「進化だ、ツノドラモン」

と、外から聞こえてきた声に辺りを見る隼人。

すると、少し離れた場所に一人立っているのが見えた。

「ツノドラモン進化！ブイドラモン！！」

隼人たちの前でブイドラモンへと進化したツノドラモン。

「なんや、このデジモン・・・」

瞳も驚いた表情を見せていた。

「でも、ちょっと待ってこのデジモン達は・・・」

隼人がそう言う

「わかってはいるけどやらなきゃならない時がある」

と、拳を握りしめるブイドラモン。

「攻撃と同時に高く跳んで」

「おい、お前は・・・」

話しかけようとするオルガモンだが

「それじゃ行くよ！」

と、拳を振り降ろすブイドラモン。

「オルガーマン！ここは言うとおりにお願いや！」

今考えている時間がないため、オルガーマンは瞳達を乗せたまま高く飛び上がった。

そして、それと同時に大地に拳を打ちつけたブイドラモン。

その勢いにより、衝撃波で周囲の野生デジモン達は吹き飛んでいった。

そして、うまく着地するオルガーマン。

「説明は後でするよ。とりあえずすぐにあのデジモン達がまた襲ってくる前に移動するよ」

と、駆け出していくブイドラモン。

「オルガーマン、刹那君たちのおる場所まで案内しようや。あのデジモンとあの人・・・五人目かもしれへんやろ」

そんなわけでオルガーマンは、ワタルとブイドラモンを案内するために先導して走り出すのであった。

ファイル19：ワタルと仲間達（1）

とりあえず先程の野生デジモンが追いかけてくる気配がなくなったので、一度落ち着くために休憩することにした隼人達。

「いいのか？仲間達を待たせてあるんだろ」

そう告げるワタル。

そして安全を確認したオルガモンとブイドラモンは、退化しオルトモンとツノドラモンに戻っていた。

「そついや、ワタルさんはなんやうちらより背高いんやな」

そう言う瞳。

「お前達はまだ小学生だろ。俺は13・・・中学一年に値するからな」

そう答えるワタル。

「それじゃ僕達の中で一番年上なんですね」

隼人がそう言う

「一応そつなるな・・・」

そう呟いたワタル。

「瞳、そろそろ行きましょう。あまり遅くなつては心配させてしまいます」

そう告げるオルトモン。

「せやな、ほな行きましようかワタルさん」

そんな訳で仲間の待つ場所に向けて、再出発した隼人達。

「ワタルさんも僕達と同じでこの世界に飛ばされたんですよね」

そう質問する隼人。

「お前達は今のこのデジタルワールドをどう思う？」

隼人の質問に答える前に、逆に聞いてきたワタル。

「隼人君の話やと元々あったデジタルワールドに隼人君のお父さん達が作つとったデジモンのゲームが融合したのが今のこの世界だろ。うって話は聞いてたんやけど」

そう告げる瞳。

「俺もこの世界の突然の変化に戸惑いはしたが、【この世界を守る存在】から話を聞いたりして今この世界に起きていることを把握した・・・」

そう説明するワタル。

「何やら話の内容がわからない所がありますが、貴方は瞳達よりも

先にこの世界に降りたったということは理解しましたよ」

そう告げるオルトモン。

「それじゃ最初の・・・一人目のってことですね」

「まあ、好きに思っていて構わない」

そう告げるワタル。

と、そんな話をしている内に刹那達の待つ場所へと到着した隼人達。

「やっと戻ってきたのか・・・!？」

と、刹那は見知らぬ人物・ワタルを見て少し警戒するような表情を見せた。

「なるほどな、お前がこのチームをまとめていたのか。常に警戒を怠らない姿勢は見事だな」

そう告げるワタル。

「大丈夫みただよ刹那。パートナーデジモンを連れてる。この人も刹那や未来と同じだ」

と、奥から現れたのはチクモンだった。

「なんや、成長期に進化できたんやな」

驚いている瞳。

「ああ、ただ待っているわけにはいかないからな」

刹那がそう言うと、隼人は未だ幼年期のままのルルモンをじっと見つめるのであった。

ファイル19：ワタルと仲間達（2）

「貴方は色々知っているのですか？」

そう質問した未来。

「ああ、お前達がこの世界から出るために必要なこと・・・俺を含めた10人を集める。それが重要だが・・・全員とは俺が接触してきた」

そう言ったワタル。

「なら、何故連れてこなかった？」

そう聞く刹那。

「ただ人数が揃ってもダメだ。お前達とパートナーデジモン・・・双方共に成長が必要だ」

「成長・・・」

そう呟く隼人。

「ウチらの成長って言われてもわからへんけど、デジモンの成長は進化なんやろ？オルトモンがオルガーマンになるように」

そう言う瞳。

「半分正解だ」

「だが俺達はその成長とは関係無しにこのクリスタルで進化をさせた……一体何なんだ？」

「クリスタルは謎な部分が多いが、過去の時代に使われていた力が現代のあちこちに眠っている……それが導かれて出された答えらしい」

そう説明するワタル。

「ワタルさんでもわからないんですね」

そう言う未来。

「だが、別のクリスタルの反応なら掴んだ……だからこそ俺が来た……」

「なら行くぞ。この場に長居しすぎた。七大魔王達が次の手を仕掛けてくる前に行った方がいいだろ」

そう考える刹那。

「目的地までは俺が先導するが、到着後は自ら行動するんだ」

「どうしてですか？」

尋ねる隼人。

「ワタルが持つべきクリスタルじゃなかったんだ……デジヴァイスであるのはわかってても、クリスタルの力を目覚めさせることは出

来なかった」

そう告げるツノドラモン。

「俺の勘だとお前達の中から二人・・・そのクリスタルの欠片に選ばれる」

「勘で分かるのか？」

「ほなら、今度はウチら二人かもしれへんな。未来ちゃん」

「えっ、そうかな・・・ねえ、ピュアモン」

隣にいるピュアモンに話を振る未来。

「それならば嬉しいよ未来。未来達を守れる力を得ることが出来るから」

そう言うピュアモン。

「隼人・・・元気ないの私のせい」

そう呟くルルモン。

「そんなこと・・・ないよルルモン」

「では行こう」

そしてメンバーは、ワタルとツノドラモンを先頭に目的地目指してスタートしていくのだった。

ファイル20：城内の戦い（1）

「ワタルさん」

歩きながらワタルに話しかける未来。

「何だ？」

「これから行く場所ってどんな所なんですか？」

そう聞いた未来。

「ただの城だ・・・誰も住んでいない」

そう答えるワタル。

「デジタルワールドにお城・・・」

「だが、内部は広く構造も複雑だ・・・しかも、手に入れるべき二つのクリスタルの欠片は別々の場所にあった・・・」

そう言うワタル。

「なら、一つずつ確実に取得していくべきだな・・・」

そう言う刹那。

「分かれて取りに行った方が早いんとちゃうん？」

そう聞く瞳。

「それは避けた方がいいな。クリスタルはお前達の中の二人とは言
ったが、誰かまでは俺にもわからない」

そう言うワタル。

「それってすでにクリスタルの欠片をもってる僕や刹那さんも選ば
れるかもしれないって事ですか？」

ワタルに尋ねる隼人。

「ああ、その可能性もある・・・」

そう答えるワタル。

そしてそんな話をしている間にワタル達は目的地である城に到着し
た。

「大きいんやな・・・こん中からクリスタル探すんやな」

そう言う瞳。

「ここから先はお前達の力で切り開いていけ。俺もついてはいくが
基本的に手は出さない」

そう告げるワタル。

「・・・手を出さないならここにいてもらってもいいが」

「ちょっと刹那・・・」

刹那の発言に慌てる未来。

「じゃあ、行こか」

そんな訳で城の中に入っていくメンバー達。

「構造が複雑で・・・中々先に行けないな・・・」

「デジヴァイスには大体の場所しか出てないから・・・」

そう言う未来。

「とりあえずは先に城の上部にあるクリスタルを取りに向かっているわけだが・・・」

「どうしたの？刹那」

尋ねるチクモン。

「ワタル、ここは危険な場所じゃないんだよな？」

そう聞いた刹那。

「・・・今この変化したデジタルワールドに安全な場所があるのかも怪しい・・・別空間とは言え七大魔王が存在している以上はな・・・」

そう言うワタル。

「ブラックナイトモン・・・究極体・・・実体が現れた訳じゃなかったが、その状態でも威圧感があった」

そう告げる刹那。

「まあ、驚異は七大魔王だけじゃないがな・・・」

そして、城の奥へと進んでいく隼人達。

「隼人！」

と、叫ぶルルモン。

「ワタル、気配が二つ・・・どうする？」

そう聞くツノドラモン。

「俺達を狙って七大魔王が仕向けた奴等か、クリスタルの力に引き寄せられた奴等か・・・だがどちらにしても俺達が手を貸すことは・・・」

そう言うワタル。

そして次の瞬間、床を突き破って一体のデジモンが隼人達の前に飛び出してきたのだった。

ファイル20：城内の戦い（2）

「何者だお前達は」

そう聞く刹那。

「俺はドラグモン・・・お前達は俺が潰してやる」

そう言うドラグモン。

「ドラグモン、成熟期・・・たった一体なら・・・」

そう言う未来。

「それならウチが行くわ。同じような獣系やしな」

そう告げる瞳。

「相手はどちらかというと龍系統のデジモンみたいですが・・・まあ、とにかくオルトモン進化、オルガーモン」

ドラグモンの前に立ちはだかるオルガーモン。

「お前が俺に潰される奴か」

「言いたいことはそれだけか？」

そう告げるオルガーモン。

「だがな・・・本当に恐ろしいのは俺が兄者とみとめる者よ」

「!?!」

と、鋭い何かを感じ取ったツノドラモン。

「隠れていた奴がいたか・・・それも」

そう呟くワタル。

と、次の瞬間強力なエネルギーが天井から放たれた。

「えっ」

突然により対処できずにそのエネルギーの渦に巻き込まれる仲間達。

「悪いな・・・ドラグモン・・・ようやく俺の相手に相応しい奴に出会えた・・・それに俺の主にも良い手土産も出来そうだからな」

「兄者・・・」

そしてそのエネルギーの渦はこの辺りを全て覆い、壁や床を崩壊させるとエネルギーの一部は下の階へと流れ落ちていくのであった。

しばらくして、辺りは静けさを取り戻していた。

「あのドラグモンも流されたようだな」

そう告げるオルガモン。

「ありがとなオルガモン。その身体で守ってくれて」

お礼を言う瞳。

「なんて事はない・・・しかし」

オルガモンはそう言いながら隣を見た。

「あの渦の中で助けられたのは刹那とチクモンだけだった・・・他のみんなは」

「オルガモン・・・」

「お前が悔やむ必要はない。俺達もとつさのことで何も出来なかったんだからな」

そう言う刹那。

「・・・案外と優しい言葉をかける奴だな」

「・・・それにおそらく残りの連中はあいつが助けている・・・」

何故か自信たつぷりにそう言う刹那。

「あの中で確認出来たんは、渦の一部が下に落ちたってこと何やけど」

瞳がそう言つと

「ならあいつの判断はそのまま下にある欠片を取りに行かせるだろ

う。なら俺達は上を目指す」

そして刹那達は、オルガーマンに乗り目的のクリスタルの欠片がある場所へ向かうのであった。

そして、残りのメンバーはというと・・・。

「あれ、僕たち」

「大丈夫だった？隼人」

そう声をかけたのはブイドラモンだった。

「全く・・・俺達が助けていなかったらどうなっていた・・・」

「ワタルさん・・・ごめんなさい」

とりあえず謝る隼人。

「でもワタル。前に来た時はあんな気配なかったよ」

抱えていた隼人達を降ろしながらそう言うブイドラモン。

「その理由を知りたいか？」

その声と共に壁を突き破り姿を見せるデジモン。

「さっき天井から攻撃してきた・・・」

そう言うブイドラモン。

「俺はディアドラモン・・・七大魔王が一人、レディバモン様の忠実なる部下・・・しかし、まずはお前を倒す・・・俺は感じているお前の真の力がとてつもないことを！！」

そう叫ぶディアドラモン。

「これ以上手をかけさせるなよ。お前達も選ばれた存在ならここから先は自力で進め！」

そう言い放つワタル。

「ピュアモン！！」

「ピュアモン進化！ハニーエンジェモン」

進化したハニーエンジェモンは、未来と隼人&ルルモンを腕に抱え飛び出していった。

「とりあえずはあいつ等に興味無しか？」

「まずはお前！その後に残り全員を始末する。だからすぐに始めようぜ！」

そう叫ぶとワタルとブイドラモンに襲いかかるディアドラモンなのであった。

ファイル20：城内の戦い（3）

ブイドラモンとディアドラモンが戦い始めた頃……。

上階の方のクリスタルの欠片の取得を目指す刹那達は、オルガーマンにて移動し続けていた。

「刹那君、どないな感じなん？」

そう尋ねる瞳。

「反応は近いはずだが、建物の構造が厄介みたいでたどり着かない」
デジヴァイスを見ながらそう答える刹那。

「それにしてもや……あの襲ってきたデジモン……ウチらを分断するのが狙い目やったんやろか」

そう言う瞳。

「分断か……」

そう呟きながら、デジヴァイスの中にある赤色のクリスタルの欠片を見る刹那。

「刹那……僕達も出た方がいいかも」

突然そう告げたチクモン。

「数は？」

「一体・・・この感じだと最初に現れたデジモンだ」

そう告げるチクモン。

「瞳、チクモンをここに残していく」

刹那がそう言う

「何でや！パートナー残して行くやなんて・・・せやったらウチとオルガーマンも」

そう告げる瞳。

「俺達は早くクリスタルの欠片を手に入れなければならない・・・ワタルが言うには俺もこのクリスタルに選ばれる可能性があるらしいから・・・だから俺も先に行かなければならない」

そう判断した刹那。

「せやかて・・・」

「心配してくれてありがとう。でも、俺なら平気だから・・・敵は俺が止める」

そう言うオルガーマンから飛び降りたチクモン。

「チクモン進化！ニードラモン！！」

「頼んだ・・・ニードラモン」

ニードラモンの方を見ずにそう呟く刹那。

そして、壁を突き破り出現したのはドラグモンだった。

「壁壊さずに通路を進んでくればいいのに」

そう告げるニードラモン。

「まどろっこしいだろ・・・それより標的を三体逃しやがったな・・・お前を生け贄に・・・」

と、ドラグモンが話している最中に突撃しドラグモンを弾き飛ばすニードラモン。

「この・・・何て奴だ」

そう言うドラグモン。

「悪いけど俺も先を急ぎたい。お前の長い話に付き合うつもりはない！」

そして、ニードラモンとドラグモンの戦いも開始されていくのだった。

そしてこちらはブイドラモンVSディアドラモン。

互いの攻撃がぶつかり合う度に、辺りは振動し時には壁などに亀裂が生じていた。

「成熟期で俺とやり合えるのは中々だが、お前がその程度であるはずないだろう・・・バーストフレア！」

とディアドラモンは、口から大炎球を放った。

「ブイブレスアロー」

完全体であるディアドラモンの攻撃を、難なく迎撃するブイドラモン。

「今のお前じゃブイドラモンにすら勝てない・・・戦い続けても無意味だ」

そう告げるワタル。

「・・・その余裕が命取りにならなければいいがな！」

そしてディアドラモンは、再びブイドラモンに向かって突撃を繰り返していくのだった。

ファイル20：城内の戦い（4）

刹那達、隼人達共に敵デジモンを仲間が足止めしている間にクリスタルの欠片の所へ急いでいた。

「オルガーマン・・・走りっぱなしで疲れとるやろ」

オルガーマンを心配する瞳。

「一人で戦っているニードラモンに比べればこの程度で倒れるわけにはいかない」

そう言うオルガーマン。

「その通路を右だ」

デジヴァイスを頼りに道を示していく刹那。

同じ頃隼人達もハニーエンジェモンの力を借りて進んでいた。

「通路に敵デジモンはいないから、この分なら早くたどり着けるよ、未来」

そう告げるハニーエンジェモン。

「ルルモン・・・僕達・・・」

と、その時順調に進んでいたハニーエンジェモンがスピードを落とすはじめその場にとどまった。

「どうしたの？ハニーエンジェモン」

尋ねる未来。

「気配がする・・・小さな気配だけど・・・」

そう呟くハニーエンジェモン。

そしてこちらはワタル達。

「お前・・・俺に勝てないと知りながら何故笑みを浮かべて戦っている？」

そう聞くブイドラモン。

「何の話だ？」

そう言うディアドラモン。

「ブイドラモン。あいつは別の何かを狙っている。すぐに片を付ける」

そう告げるワタル。

「ああ、ブイブレスアロー！」

ディアドラモンに放たれるブイドラモンの一撃。

だが、ディアドラモンは自身の身体でブイブレスアローを受け止め

た。

「なっ・・・」

驚くブイドラモン。

「俺の身体は頑丈だぜ。だからこそ強い相手とも戦っていけるわけだ」

そう話すディアドラモン。

「あまり力はいえない・・・今のままで倒せ、ブイドラモン」

ワタルがそう指示すると、早速攻撃に転じるブイドラモン。

（全ては俺の計画通りだ）

そう心の中で思うディアドラモン。

そして、上を目指していた刹那達は最上階にたどり着いた。

「刹那君、クリスタルの詳しい位置は・・・」

瞳が聞くと

「あの奥の部屋みたいだ」

と、じつと奥の部屋の扉を見るオルガモン。

「離れているんだ瞳、刹那」

「オルガーマン……って……」

嫌な予感がする瞳。

「バーニングブラスト！」

と、攻撃技を放ち扉を破壊したオルガーマン。

「クリスタルが壊れる事はないと思うが……やりすぎじゃないか」

そう感じる刹那。

「だが、限界だな」

と、オルガーマンはオルトモンに退化してしまった。

「大丈夫か？」

オルトモンを抱き抱える瞳。

「早く奥へ……」

静かにそれだけ告げるオルトモン。

「瞳！ 急げ」

刹那に急かされ奥へ向かう瞳。

そして刹那と瞳は、奥の部屋で何やら輝いているクリスタルの欠片

を見つけたのであった。

ファイル21：進化と大バトル（1）

「クリスタルの欠片・・・」

そう呟く刹那。

そんな中瞳はただじっとクリスタルの欠片を見つめていた。

「おい、瞳・・・」

声をかける刹那。

「輝きが・・・見えるんや・・・」

そう呟いた瞳。

「輝き・・・？」

「クリスタルの中に見える・・・輝き・・・」

瞳がそう言った時、突然クリスタルの欠片と瞳のデジヴァイスから光が放たれた。

そして、クリスタルの欠片は浮かび上がるとそのまま瞳のデジヴァイスに収納されていた。

「ん・・・何や気持ちがあええな・・・クリスタルの欠片の輝き見てから」

そう言う瞳。

「まずは瞳が片方の所有者か・・・後は・・・」

刹那がそう言った時、下の方で爆発が起き辺りが揺れていた。

「今の爆発と揺れは・・・」

辺りを見渡すオルトモン。

「まさか・・・」

と、刹那はこの部屋にあった窓を開け下を見るとニードラモンとドラゴモンが空中でつかみ合っているのが見えた。

「刹那君、何か見えたんか？」

瞳も何が起きているのか知りたいらしく、刹那に尋ねた。

「ニードラモンがまだ戦っている」

そう告げる刹那。

「ほなら、そこに向かわんと・・・ここでの目的は達成したんやし」

「ああ、行こう」

急いで下の階へ向かう刹那達。

その頃、隼人達は一番下の階にたどり着いていた。

「何とかたどり着いたけど・・・ずっと小さな気配は感じたまま・・・」

そう呟くハニーエンジェモン。

「とにかく刹那達も欠片を手に入れてるかもしれないし急ぎましよう」

そう言い一歩踏み出した未来。

だがその時、足下の床にひびが入りそこから複数の小さなデジモンが飛び出してきたのだった。

「未来！隼人！」

とつさに未来と隼人&ルルモンを抱えその場を離れたハニーエンジェモン。

「あいつ・・・気配察知も動きも良い・・・強いな」

そう告げていたそのデジモン。

「あいつは・・・プチドラモン・・・成長期だよ未来さん」

デジヴァイスで調べた情報を未来に伝える隼人。

「私も見てるけど・・・情報だと成長期でも【ドラモン系】の強さは秘めているって」

そう言う未来。

「成長期だからって・・・油断していると・・・」

と、その時ハニーエンジェモンは背中に強い衝撃を受けた。

「ハニーエンジェモン!？」

驚く未来。

「未来達だけは・・・」

ダメージを受けていながらも、未来達を安全に下へ降ろすハニーエンジェモン。

「天井にも・・・」

天井を見上げてそう言うハニーエンジェモン。

「ここで、お前達・・・終わり」

そう言いながら周りを囲みながら近づいてくるプチドラモン達。

「隼人・・・」

そう呟くルルモン。

「今は僕が・・・刹那さんみたいに強気に・・・瞳さんみたいに元気に・・・未来さんを守らなきゃいけないんだ・・・」

と、光を放ち始める隼人のデジヴァイス。

「何だ・・・あの光」

そう告げるプチドラモン。

「ルルモン進化、ミルモン！」

そのデジヴァイスの光を受けて、ルルモンはミルモンへ進化した。

「ミルモン！」

笑顔を見せる隼人。

「隼人に足りないもの・・・強い思いと前に踏み出す勇氣。でも、今の隼人は前に僕を進化させてくれた時と同じ・・・心が強くなった隼人だから・・・」

と、更に輝きを増すデジヴァイス。

そして、浮かび上がる【Va】の文字。

「ミルモン進化！セントモン！」

隼人の強い思いと勇氣を受けたミルモンは、ワクチン種の成熟期・セントモンへ進化したのであった。

ファイル21：進化と大バトル（2）

「セントモン……」

そう呟く隼人。

「今はこの場を乗り越えるのが先。気持ち強く持って……隼人」
セントモンにそう言われて頷く隼人。

「進化した……だが……数ならこちらが上」

そう告げるプチドラモン。

「それはどうかしらね……」

そう言うところ構えたセントモンは、その爪から必殺技を放つ。

「シャイニークロー！」

光の爪撃が周囲のプチドラモンを蹴散らしていく。

しかし、四方八方に散っているプチドラモンはいつでもセントモン達の死角から攻撃できる状態にいた。

「みんな私の背中に……ハニーエンジェモンもピュアモンに戻って回復に専念していた方がいいわ」

そう告げるセントモン。

「ええ、そうさせてもらっわ」

と、ハニーエンジェモンはピュアモンに退化した。

そして、セントモンの背中に乗っていく隼人達。

「しっかり掴まって・・・そして、目を閉じていて」

そう言ったセントモン。

「目を・・・閉じるの？」

そう聞く未来。

「大丈夫・・・少しの間だから・・・あとは私を信じて」

そう言うセントモン。

「絶対に大丈夫だよ未来さん。セントモンなら」

「隼人君・・・うん、私も信じてる」

セントモンにしがみつき、目を閉じる隼人達。

「一斉・・・突撃・・・」

プチドラモンの一体がそう言うのと、一気にセントモンに襲いかかる
プチドラモン達。

「ライトニング・・・」

と、光に包まれていくセントモン。

そしてその光は、背中にいた隼人達も包み込んでいった。

「あたたかい感じ・・・」

そう呟く隼人。

「スマッシュャー!!」

その言葉と同時に飛び出していったセントモン。

光の突撃に弾き飛ばされていくプチドラモン達。

「まとまれば成長期のデジモンも強いけれど、個々でなら負けませんよ」

そして、プチドラモンの群れを蹴散らし奥へと向かっていったセントモン。

そして、最奥の大きな扉の前でその足を止めた。

「ここが一番奥・・・」

そう告げるセントモン。

「未来・・・ありがとう・・・支えていてくれて・・・もう大丈夫」

そう言うピュアモン。

「隼人、未来、ピュアモン・・・扉の先へ行つて。私はここで追ってくるデジモンをくい止めます」

そう告げ隼人達に背を向けたセントモン。

「うん、お願いセントモン」

この場をセントモンに任せ、扉の奥へと向かう隼人達。

「ピュアモン・・・」

「あれが・・・クリスタル」

そう言う未来とピュアモン。

「僕が持っているのは赤色だけど、これは緑色だね」

そう告げる隼人。

「・・・何だろ・・・不思議な感じ」

その緑色のクリスタルを見て、瞳の時同様の状態になっていた未来。

「もしかして・・・未来さんがこのクリスタルの・・・」

そつと宙に浮かんでいる緑色のクリスタルに近づく未来。

「これが私のなら・・・」

そして、なでるように触れる未来。

その直後、クリスタルは輝きを放ちそのまま未来のデジヴァイスの中に吸い込まれていった。

「やっぱり未来さんだったんだね」

喜んでいる隼人。

「後は刹那と瞳さんの方だけど・・・」

未来がそう言った時、突然爆発と共にブイドラモンとディアドラモンが壁を突き破って飛び込んできたのであった。

ファイル21：進化と大バトル（3）

「ブイドラモン！？」

驚く隼人。

その直後、ワタルが隼人達の前に降り立った。

「ワタルさん」

声をかける未来。

「予想外だったか・・・ディアドラモン」

ディアドラモンを睨みつけるワタル。

「こんな所に仲間がいたか・・・まだまだ俺を楽しませてくれそうだな」

そう言うディアドラモン。

「隼人、未来・・・クリスタルは・・・」

ワタルがそう言う

「未来さんが緑色のクリスタルの欠片を・・・」

そう答えた隼人。

「そうか・・・なら、未来とピュアモンは上に向かえ・・・刹那・瞳達も欠片を入手しているはずだからな」

そう告げるワタル。

「でも、未来さん一人で・・・」

未来を心配する隼人。

「わかりました。私行きます」

「未来さん・・・」

「私もね守られてばかりじゃ格好悪いでしょ・・・それにクリスタルの力が必要なんですよね・・・ワタルさん」

そう言う未来。

「ディアドラモンは想像以上にしぶとい・・・こいつを倒すには同じ完全体の力が必要だ」

そう考えるワタル。

「だったら僕と刹那さんも・・・」

そう提案する隼人。

「今の二人のデジモンにクリスタル進化するだけのエネルギーは残ってないだろう・・・それに・・・」

と、そこで言葉を止めたワタル。

「それにつて・・・」

「とにかくだ・・・隼人は俺達の援護に回れ・・・」

「大丈夫だから・・・行つてきます」

ピュアモンと共に駆けていく未来。

ディアドラモンはそれを横目で見ながらも、止めることはしなかった。

「わざと見逃したのか？」

そう聞くワタル。

「逃げる奴にはあまり興味がねえ・・・だが、お前等の話じゃもつと強くなる手段を持っているらしいな・・・なら俺はそいつと全力で戦いたいんだよ」

そう告げると共に雄叫びをあげるディアドラモン。

「気迫が凄いわね」

そう告げるセントモン。

「じゃあ第二ラウンドと行こうか！」

そう叫ぶとディアドラモンは、ブイドラモンとセントモンに襲いか

かるのであった。

その頃の刹那達かというと・・・。

下の階に降り、ドラグモンとの戦いを終えたニードラモンと合流していた。

「無事だったか、ニードラモン」

「ああ、何とか外に連れ出してそのまま真つ逆様に落とさせたよ」

そう言うニードラモン。

「なんや恐ろしい決着やな」

そう告げる瞳。

「まだ飛べるか？隼人達と合流しないといけない」

そう言う刹那。

「移動するだけならまだ大丈夫」

そんな訳で疲れていながらも、合流の為刹那達を乗せ城内を飛んでいくニードラモン。

「他の気配が無くなっている感じがするが・・・」

オルトモンがそう言う

「あつちに全部まわっているんだろうな・・・ワタルがいるとはいえ・・・」

そんな事を言う刹那の表情をじっと見ていた瞳。

「せやな、大事な妹なんやろしな・・・合流したらウチらが頑張らんな」

そう意気込む瞳。

「・・・ニードラモン、進路を変更だ・・・一つ・・・デジヴァイスの反応が近づいてきている」

そう伝えた刹那。

「わかった、指示の方に向かう」

了承するニードラモン。

そしてこちらは未来とピュアモン。

未来も自分のデジヴァイスに反応があることに気付いていた。

「ピュアモン、デジヴァイスの反応・・・二つ・・・移動してるスピードは速いよ」

そう言う未来。

「刹那達ね・・・ここはじっとしていきましょう。が私達じゃスピードが遅いから」

そう告げるピュアモン。

「刹那君、向こうの反応やけど・・・」

刹那同様にデジヴァイスを見ていた瞳がそう言った。

「近いぞ、ニードラモン」

それを知りスピードをあげていくニードラモン。

そして、刹那達はいいた時間もかからずに未来と合流出来たのだ
った。

ファイル22：舞う風の戦士（1）

「隼人とワタルが・・・」

未来から状況を聞かされた刹那達。

「ほなら急がんな刹那君」

そう告げた瞳。

「ニードラモン・・・」

「これ以上は辛いかな・・・急いで運んであげたいけど・・・」

と、ここでニードラモンはチクモンに退化してしまった。

「戦いの後にここまで飛んだんだ・・・さすがにスタミナ切れか」

そう言う刹那。

「・・・行きましよう瞳さん」

と、そう言った未来。

「行くて・・・刹那君は・・・」

「刹那ならそうするでしょ・・・私達が行かなきゃこの戦いを終わらせられない・・・そう思うから」

そう言いながらデジヴァイスの中のクリスタルを眺める未来。

「行け、この城で残っている敵はおそらくディアドラモンだけだ・
・だから・」

「優しい男の子な隼人君・・だから刹那は強い心でいて・・私の兄って立場に縛られないで」

そう言う未来。

「・・・強い男でいろって事が・・なら・・未来！瞳！先に行け！」

二人にそう指示した刹那。

「こうなったら自分を貫くしな刹那君は・」

「それじゃ行きましょう・・隼人君達の所へ」

そう言って駆け出す未来達。

「刹那、ピュアモンとオルトモンのスタミナは・」

チクモンがそう言うと

「どこまで回復してるかわからないが・・クリスタルの力で進化しなければあいつは倒せない・・かもな」

そう告げると座り込む刹那。

「強い男の子・・・俺のその部分は誰かが側にいるから出てくる・・・
一人の時は・・・」

静かにそう言うと、休むために目を閉じる刹那。

そしてそんな刹那に寄り添うチクモンなのであった。

同時刻・・・。

階下の戦いは大変なことになっていた。

タフすぎるディアドラモンとの戦い。

すでにセントモンは力尽き、ミルモンに戻っていた。

「ぐっ・・・」

そして、ディアドラモンの攻撃についてブイドラモンも膝を突いていた。

「どうした・・・お前もそこまでか？」

「ワタル・・・そろそろ俺も・・・」

そう告げるブイドラモン。

（・・・ブイドラモンは完全体相手でもひけをとらない・・・だがあいつは・・・あいつもブイドラモン同様通常レベルより能力が上か）

そう考えるワタル。

「・・・仕方ねえか・・・少々惜しいが・・・倒しておくとするか」
ゆつくりとブイドラモンに近付くディアドラモン。

「ミルモン・・・」

「ごめん隼人・・・これ以上は進化・・・出来ないよ・・・」
そう告げるミルモン。

「終わりだな・・・」

腕を思い切り振り上げるディアドラモン。

だが、その時

「ハニーフェザー！」

「フリージングブラスト！」

二つの攻撃がディアドラモンの腕に直撃した。

「ほう・・・」

「未来さん、瞳さん・・・」

そう呟く隼人。

「ギリギリだったみたいやな」

「後は私達に任せてください」

そう言い放つ未来。

「遅いご登場なら何か俺を楽しませてくれるものを用意してきたんだろうな」

そう言ったディアドラモン。

「もちろんだ」

そう返答するオルガモン。

「私達の力を見せてあげるわ」

そう告げるハニーエンジェモン。

そして未来と瞳のデジヴァイス内のクリスタルが輝き始めた。

「ウチらに迷いはないな」

瞳がそう言つと

「隼人君と刹那が先に見せてくれたから・・・でも、それだけじゃないよ。私達しか今みんなを救えないから」

その直後交わる二つのクリスタルの欠片。

「ハニーエンジェモン、オルガーマン、クリスタルエボリューション！！」

緑色の光に包まれるハニーエンジェモンとオルガーマン。

「風のクリスタルの力を纏いしデジモン、ゼフィロスモン！」

今ここに風の力を宿した新たなデジモンが誕生したのであった。

ファイル22：舞う風の戦士（2）

「ゼフィロスモン…」

そう呟く隼人。

「お前…強いな…感じただけでわかるぜ」

そう告げるディアドラモン。

「どうかしらね…貴方自身で確かめてみたら？」

そう言ったゼフィロスモン。

「いい度胸だな…なら、さっそくやらせてもらうぜ！」

そう叫ぶと先程まで戦っていたとは思えないほどの動きで攻撃を仕掛けてきたディアドラモン。

「ずっとブイドラモンと戦い続けてたのに…まだあんなに動けるなんて…」

隼人が驚いていると

「…俺と同じだと思う…特別なデジモン…上位種のデジモン」

そう告げたブイドラモンが退化したツノドラモン。

「ワタルさん、上位種って…」

「俺のパートナーデジモンは通常の進化レベルよりも強い能力を持っている。だから、成熟期のブイドラモンでも完全体のディアドラモンと互角に戦えるという訳だ」

そう説明するワタル。

「じゃあ、ディアドラモンは…」

「これは直接戦ってみての推測だけど…あいつ戦いを楽しんで…そして、強い相手と戦う時に通常以上の能力を発揮するんだ…」

そう言うツノドラモン。

「ある意味強い思いで自身の能力を上げてるわけだがな」

ディアドラモンを見ながらそう言うワタル。

「ゼフィロスモン…やり方は貴方に任せるから」

そう告げた未来。

「うちらにはまだ完全にデジモンの心はわからへんし…」

そう言う瞳。

「大丈夫よ。任せて…未来、瞳」

そう告げるとディアドラモンを迎えつつゼフィロスモン。

鋭い攻撃を繰り出していくディアドラモン。

それに対してゼフィロスモンは舞うようにその攻撃をかわしていた。

「かわしてばかりで戦う気はあるのか！ゼフィロスモン！」

「…それが貴方の本気？出し惜しみする必要はないわよ…」

挑発するように言うゼフィロスモン。

「ワタルさん…ゼフィロスモンは…」

隼人が尋ねると

「ゼフィロスモンにも何か思うところがあるんだろう…まあ、あまり甘い考えを持っているとやられかねないがな」

そう告げるワタル。

「…いいぜ…なら渾身の…本気の一撃をお前にぶつけてやる…」

と、右腕に力を込めていくディアドラモン。

「…」

そして、それを待っているかのように動かないゼフィロスモン。

この場の全員が、この戦いの行方を静かに見守っていた。

「行くぜ、俺の全力…」

強く床を蹴り一気にゼフィロスモンに向かっていくディアドラモン。

「惜しいわね…貴方の強い思いが正義の方に向いていたら…きっと良いパートナーデジモンになれたのに…」

そう告げたゼフィロスモン。

そして、ゼフィロスモンに放たれたディアドラモンの渾身の一撃。

「!？」

確実に捉えたと思っていたディアドラモンであつたが、その一撃はゼフィロスモンの身体に届いてはいなかった。

「風の…渦だと…」

風の渦がディアドラモンの腕の周囲に出現し、その攻撃を受け止めていた。

「もし、あなたが生まれ変わることがあるのならその時は…」

そう告げると構えるゼフィロスモン。

「サイクロンステップ」

と、舞うような動きでディアドラモンの周囲を移動すると次々と風を纏った拳や蹴りの連撃を放って行くゼフィロスモン。

「なんだよこの攻撃は…俺を楽しませてくれるんじゃないのか」

「？」

ゼフィロスモンの連撃はスピードはあるものの、大きなダメージを与えるまでにはいたっていなかった。

「あら、気付いていないの？貴方はすでに私のテリトリーの中にいるのよ」

と、ディアドラモンはゼフィロスモンに大きな風の力が集められているのに気付いた。

「これは…」

「これはどうということなんや？」

「ゼフィロスモンのあのステップは連続攻撃で相手の動きを止めるのと同時に、自分にエネルギーを溜めていたのよ」

そう言う未来。

「これがあの二人のデジモンから生まれた…風の戦士の戦いか」

そう呟くワタル。

と、最後に蹴りを放つと同時にディアドラモンから距離をとったゼフィロスモン。

「最後です…集束されし風の一撃…」

「へっ…やっぱり強いじゃねえか」

そう呟いたディアドラモン。

「ストームブレイカー！」

自身に集めた風のエネルギーを集束させ、構えた両腕から放たれた強力な風の一撃。

それはそのままディアドラモンに直撃した。

「ワタル…今、ディアドラモンは…」

「…何のつもりなんだか…」

ツノドラモンが何かに気づいたように、ゼフィロスモンもそれに気付き飛ばされ倒れているディアドラモンの元に飛んでいった。

「情けをかけるつもりか？」

「…なぜ抵抗しなかったの？貴方の本気ならまだ…」

そう告げるゼフィロスモン。

「俺の本気…お前に通じないことはわかっていた。強い奴ほど相手の強さとの差がわかるというらしいが…これがそうだな」

「ディアドラモン…」

「俺は七大魔王の部下だ…情けはいらないぜ…俺はお前やあのドラモンとの戦いで楽しめた…」

と、静かに目を閉じるディアドラモン。

「強者は常に…勝ち続けやがれ」

その言葉とともに消滅していったディアドラモン。

「…なんや悲しいデジモンやったな」

そう告げる瞳。

「そうね…ただ戦いたいだけのデジモンじゃなかった…そう思う…でも今は…お疲れ様ゼフィロスモン」

そう笑顔で告げる未来なのであった。

ファイル23：ワタルの謎

「で、その姿にまで戻ったうちゅうわけやな」

突然そう告げる瞳。

瞳と未来の前には小さなデジモンが二体存在していた。

「ピュアモンの幼年期、パイピモンよ」

「オルトモンの幼年期、キバモン」

そう自己紹介したパイピモンとキバモン。

「ミルモンも完全体に進化した時はそうだったよね」

そう告げる隼人。

「そうだ、刹那と合流しないと…」

そう言った未来。

だが、その時この建物が突然振動を始めたのだった。

「えっ、何や」

驚く瞳。

「何か仕掛けがしてあったようだな…それともこの戦いの影響か…」

お前達はすぐに脱出しろ…ミルモンの力ならまだ進化できるはずだ。
それで壁を破壊して外へ」

そう指示したワタル。

「でも、刹那君は…」

「俺達が合流する。さあ、行け！」

そう言うとツノドラモンと共に駆け出して行ったワタル。

「刹那…隼人君！お願い」

「う、うん…ミルモン…えっと…セントモンに進化できるかな…」

そうミルモンに告げる隼人。

「隼人、進化はデジモンとタイマーの心が生み出すと思うの…だから…隼人が強く思っ…私の進化を」

「ミルモン…」

「何や良いパートナーな雰囲気なのはわかるんやけどな…」

そう言う瞳。

「うん、行くよミルモン」

隼人の言葉に反応するように、デジヴァイスに表示される【Va】の文字。

「ミルモン進化、セントモン」

「ミルモンの進化も謎だけど…それを少しずつコントロール出来るようになつてみたい」

そう言うピィピモン。

「みんな、私の背中に」

隼人を含めた全員が背中に乗ったのを確認して、セントモンは自身の爪に力を込めた。

「シャインネイル！」

光の力を纏った爪で壁を破壊するセントモン。

だが、建物の上部が崩れだしセントモン達の頭上に落下してきていた。

「セントモン！」

「大丈夫、ライティングスマッシャー！」

光を纏い一気に駆け出したセントモンは、瓦礫が落ちて来るよりも早く外へと脱出することに成功したのだった。

「後は、刹那君やけど…」

心配そうな表情を見せる瞳。

その頃、その刹那はというと…。

「まずいよ刹那、早くここから…」

そう言うチクモン。

「少し休みすぎたかな…せめてお前が進化できるまで回復できればよかったんだけどな…だが、戦いの振動はこの建物の崩壊の前に止まった…みんなは無事だな」

「いつもの刹那らしくないよ。いつもの刹那なら自分にも仲間にも厳しく…その無事な姿を見せなきゃ」

そう言うチクモン。

「…厳しく見えているのはまわりだけだ…本当の俺は…」

そして、刹那の周囲も次第に崩れ始めていた。

先に脱出した隼人たちは、外から刹那とワタルの脱出を待っていた。

「刹那…無事でいて…」

そう願う未来。

だが、そんな思いも届かなかったのか建物はゆっくりと瓦礫の山へと変化していった。

「そんな、嘘やろ…」

そう呟く瞳。

だが、その直後大きな翼を広げたデジモンがその瓦礫の中から飛び出してきたのだった。

「未来、あのデジモンの腕の中…ワタルと…刹那・チクモンもいるよ」

そう告げるピィピモン。

「なら、あのデジモンは…ワタルのデジモン？」

そう考えたキバモン。

そして、その翼を持つデジモンは隼人達の前に降り立った。

「…これって…」

隼人はデジヴァイスに表示されたそのデジモンの情報に驚いていた。

「エアロブイドラモン…完全体…」

と、そのデジモン・エアロブイドラモンはツノドラモンへと退化した。

「…刹那、大丈夫」

真っ先に刹那に駆け寄った未来。

「心配ない…俺はお前の兄だしな…それに…このチームをまとめられるのは俺だけだ」

そう言い放った刹那。

「ワタルさん…さっきのデジモンは…完全体ってクリスタルの力でじゃないと進化できないんじゃない…」

そんな事を言いながら隼人は、ワタルが手に持っていたデジヴァイスの画面の中に何かの紋様が入っているのを見た。

「…今はまだな…直にお前達もそのラインにたどり着くことになる…だが、今は…」

そう言うワタル。

「ちょっと考えてみたんやけど…うちの所に七大魔王の刺客が来てるんやったら、ワタルさんが出会った他の仲間達の所にも出てきてるんとちゃうん？」

そう言った瞳。

「…必ずとは言えないが心配はない…七大魔王は…特に俺に惹かれてるらしいからな」

そう答えたワタル。

「今は強力な仲間だが…いつかは聞きたいものだ…その秘密を」

そう告げた刹那。

「お前達が俺とツノドラモンのたどり着いた境地まで来られたら話してもいい…それに俺にはやり遂げなければならない事がある…だからこそこのデジタルワールドに留まっている」

「じゃあ、デジタルワールドに来てから一度も現実世界に戻ってないんですか…家族とかは…」

そう聞く隼人だったが、ワタルは無言のままだった。

「ワタル…デジタルワールドを見てきたのなら多少安全な場所を知っているんじゃないのか？俺なりに色々考えをまとめる時間も欲しい」

リーダーらしくそう言う刹那。

「わかった…とっておきの場所に案内する…」

そんな訳で隼人達は、ワタルに案内されその場所へと向かっていくことになるのであった。

ファイル24：隠れ家

「何処に行くのかな・・・」

そんな事を考えていた隼人。

「とにかくは敵が本格的に攻めてくる前に色々知って、これからの対策をたてた方がいいだろ」

そう告げる刹那。

「焦っとつたら余計に悪くなることあるしな」

そう言う瞳。

「残りの仲間と早く合流したいものね」

そう告げた未来。

「心配しなくても他のみんなも君達同様に成長している。時期が来れば巡り会える」

そう言ったワタル。

ワタル達がそんな行動を起こしている頃・・・。

とある異空間内では・・・。

「さすがにパートナーがいるだけで強くなるな」

そう告げたのは七大魔王の一人、ブラックナイトモンであった。

「私の配下のデジモンまで退けるなんて・・・やりますわね」

そう言ったレディバモン。

「しかし、あのワタルとパートナーのツノドラモン。彼等だけは強さが別格のようだな・・・それに・・・」

「何ですか？」

そう聞いたレディバモン。

「この身体の奥から込み上げてくる何か・・・それが何なのかはわからないが・・・いづれ直接会う・・・その時にわかるだろう」

そう告げたブラックナイトモン。

「ヒッヒッヒッ・・・」

と、暗闇より聞こえてきた声。

「珍しいこともあるものね・・・貴方が出てくるなんて」

そう言うレディバモン。

そして、暗闇より姿を現したデジモン。

その姿は人の姿に近い存在だった。

「お前さん達のおかげでいいデータがとれたぞい・・・それに加え
て奴等はワシのエリアへと向かっておるからな・・・レディバモン・
・・・奴等を足止めするなら今のうちじゃぞ」

そう告げたそのデジモン。

「プロフェモン・・・遠慮しておくわ。奴等を叩くには準備が必要
ですからね・・・一先ずは貴方に譲りますわ」

そう言ったレディバモン。

「貴方が出ると言うことは・・・」

そう告げるブラックナイトモン。

「準備は整いつつある・・・あとは奴等の来訪を待つだけじゃよ」

そう告げたプロフェモン。

「お前の本気とは俺も戦いたくないものだな」

そんな事を呟くブラックナイトモン。

そして、同時刻。

ワタル達はというと、新たなエリアに足を踏み入れていた。

「辺りに自然が一杯のエリアですね」

そう告げた隼人。

「・・・隼人、その近くの木に触れてみてくれ」

ワタルに言われて一番近くの木に触れようとした隼人。

だが隼人の手は、木に触れることなくすり抜けたのであった。

「どないなってるんや？」

驚きつつも不思議がっている瞳。

「木々がたくさんありあたかも自然いっぱいに見えるが、その半数は・・・立体映像だ」

そう答えたワタル。

「立体映像か・・・にしては触れるまで見分けがつかないな。デジタルワールドだからか？」

そう聞いた刹那。

「あるデジモンの影響だ。いや、策略と言ってもいい」

「それって・・・七大魔王とか・・・」

未来がそう言うと言で頷くワタル。

「直接はこの世界にか変われないけど、間接的に仕掛けてくる。とくに、このエリアを担当しているのは・・・」

そう告げるツノドラモン。

「その魔王デジモンを知っているのか？」

また聞く刹那。

「名前だけはな。よほど宣伝したらしい・・・自身でデジモン一
の天才と言っている・・・その名もプロフェモン」

「プロフェモン・・・あのブラックナイトモンと同じ七大魔王デジ
モンの一体・・・」

そう呟く隼人。

そんな話をしている最中、足を止めたワタル。

「そろそろだ・・・この辺りだからな」

そう告げたワタル。

「この辺りって言われてもやな・・・まだ木々があるだけや」

「俺が先頭でいくから、ついてきて」

そう言うツノドラモンは正面の木にぶつかっていった。

「あつ、危な・・・」

隼人がそう言った瞬間、ツノドラモンの姿はそこから消えていた。

「今のつて・・・転送・・・」

そう呟いたピィピモン。

「行くぞ、チクモン」

と、恐れることなく飛び込んでいった刹那とチクモン。

そして、隼人達もそれに続き最後にワタルも飛び込んだ。

「どない・・・なったんや」

目を閉じていた瞳は、ゆつくりとその目を開けた。

「やあ、とりあえずは初めましてかな」

瞳達が見たのは、そんな風に挨拶してきた一人の人物の姿なのであった。

ファイル25：ワタル達の過去（1）

「えっと、ワタルさん…」

突然挨拶してきた人物に驚き、ワタルに尋ねる隼人。

「心配はない。この人は味方だ…人って言うのもまた違うだろうがな」

そう説明するワタル。

「どういう意味なんだ？」

そう聞く刹那。

「私の名前はゲンナイ。この世界を陰から守っている役目を持っていると言えばいいかな…表立ってはワタルがやってくれているんだけどね」

そう言うゲンナイと名乗った人物。

「ここって、ゲンナイさんの住処なんですか？」

今度は未来が質問した。

「色々と工夫がされていてね、出入り口はいくつものエリアに設定されている…実際この住処があるのは通常のデジタルワールド内ではないんだ」

そう告げるゲンナイ。

「なんや、難しい話やな…」

「ワタル、とりあえずは…」

そう告げるツノドラモン。

「ゲンナイさん、ここまでは何とか七大魔王達の刺客を退けてやってこれました…他の五人も敵がこちらに注目している以上は、狙われすぎている事はないと思います…」

そう言うワタル。

「ゲンナイさんはワタルさんの事情を知っているんですか？」

そう聞いた隼人。

「…なるほど、まだワタルは話していないんだね」

そう告げるゲンナイ。

「…今はまだ…」

そう呟くワタル。

「確かに今はまだ早いかもしれない…だけどこれから長い闘いの中で本当に信頼しあえる仲間になるには…必要な事だと思う」

そう言うゲンナイ。

そんなゲンナイの言葉に、真剣な表情になるワタル。

「無理に聞こうとは思いません。本当に話したいと思ったらいいですよ、ワタルさん」

ワタルの事を思い、そう告げた未来。

「ツノドラモン…お前の意見も聞きたい」

「俺は…ワタルのパートナーだ。ワタルがやりたいようにやればいい。もしそれで何が起きても…俺が側にずっといるから」

そう言い放つツノドラモン。

その表情には曇りは一つもなく、瞳には強い気持ちが込められていた。

「最初に言っておきたい…俺の話を聞けば…お前達は今のこの世界の事実と…過去を知ることになる…」

そう告げるワタル。

「事実と過去…」

そう呟く隼人。

「ワタルが活動する以前の過去の戦いについては後で私が説明しよう…君達と同じようにデジモン達と関わった人達の話だね…それじゃワタル…」

後押しするように言うゲンナイ。

「…まずこれは事実だが俺は今回の事で選ばれた子供じゃない…ゲンナイによって無理やり入れてもらったようなものだ」

「無理やりて…そんなん可能なん？」

そう聞く瞳。

「色々とね…私が何もなくてもこの世界はワタルを選ばれし子供に指摘していたはずだよ」

そう言うゲンナイ。

「俺は隼人達から見えて一つ前の選ばれし子供としてデジタルワールドに来た…そして、パートナーであるツノドラモンと出会った」

長い話になるので、全員椅子に座って話を聞いていた。

そして、隼人達にお茶を配るゲンナイ。

（お茶にお茶菓子…デジタルワールドにも普通にあるんやな…）

そう思っていた瞳。

「俺達がこの世界にやってくるのは、この世界に危機が迫っているから…隼人達から見れば七大魔王の力の侵攻が原因となるな…俺達の時も今とは違うが闇の勢力がデジタルワールドで暴れていた」

そう説明していくワタル。

「…そして、俺達はデジモン達と共に成長し…最後の戦いの場へとたどり着いた…この世界を支配しようとしていた真の闇を操りしデジモン…」

「ワタル、そのデジモンは…何者だ？今の七大魔王にいますか？というのか？」

刹那が尋ねると

「いや、ゲンナイさん達陰の協力者やデジモン達のおかげでそのデジモンはこの世界から消滅した…だが…」

そこで表情を変えるワタル。

「奴は消滅する寸前に邪悪なエネルギーをこの世界全体に放った。俺達や協力者たちはその世界に散った邪悪な力を滅するためにもまたデジタルワールドを旅した…だけど、今思えばそれこそがそのデジモンの罠…だった」

「罠って…」

「この世界のラスボスといえるデジモンを倒して、気持ち的にも軽くなっていたからだろう…邪悪な力の対処を甘く見ていた…そして、その隙を突くように…その力は俺達に襲いかかった」

全員無言で話に聞き入っていた。

「…」

「ワタルさん…」

心配そうに言う隼人。

「だが、あまりにも世界中に散ってしまったその力は私達でも中々滅するのは困難だった。あるいみ真の闇のデジモンが分散して現れたようなものだったのだ…そして、その力は子供達に襲いかかった」

ゲンナイの言葉に驚く隼人達。

「デジモンじゃなくて子供達に…」

そう呟く未来。

「邪悪な力に取り込まれたワタルの仲間の一人は、そのまま闇の空間の中に消えてしまった…それ以降姿を見せる事はなかったと聞く」

そう言うゲンナイ。

「ワタルさんの仲間が…それで…」

話の続きを聞く事が少し怖くなっていった隼人であったが、やはり気になるのかワタルにそう言った。

「そこからは俺達も慎重に対処しようとした。だが、邪悪な力は次々と仲間達を取り込み…闇の世界へ引きずり込んでいった…残されたのは俺とツノドラモン…そして、仲間達のパートナーデジモン達…だが、協力者たちの活躍もあって邪悪な力は世界から完全に消失する事が出来た…だが、消えた仲間達が戻ってくる気配はなかった」

…」

と、ここでツノドラモンが

「だから俺とワタルはしばらくの間デジタルワールドを旅して仲間達の行方を探す事にしたんだ」

「…この出来事は数年前の話…当時の俺は隼人達と同じぐらいの歳だったな…」

ワタルがそう言うつと

「せやけど…今のワタルさんって中一ぐらいに見えるんやけど…」

そう告げる瞳。

「…その事についてとここからは私が話そう…自身が辛い話をするのは大変だろうからね」

そう言うゲンナイ。

そして、隼人達はこの世界に起きた出来事をこれから知っていく事になるのであった。

ファイル25：ワタル達の過去（2）

「まず隼人君達の疑問・・・」

そう告げるゲンナイ。

「話の流れからしてワタルは下手したら高校生ぐらいの年齢にいつてなければおかしい・・・そう言うことだな」

刹那がそう言うと、頷いた隼人。

「その話をする前に、あるデジモンのことを話したい・・・この世界を守る四聖獣デジモンと同じように偉大なるデジモン・・・時空間を操り時を司る【トキドラモン】」

「トキドラモン・・・」

そう呟く隼人。

「約二年だ、俺達が旅の中でトキドラモンと出会ったのは・・・」

静かにそう言うワタル。

「トキドラモンはこの世界では神に近い存在と呼ばれているデジモンなんだ。だけどトキドラモンはワタルの話を真剣に聞いていたと言う・・・」

以前ワタルから聞いた話を思い出しながら語るゲンナイ。

「何となく話が見えてきたんやけど・・・ほんまなんな・・・」

信じられないような表情を見せる瞳。

「ワタルの思いを受け止めたトキドラモンは、ワタルに自身が持つデジコアの一つを使いワタルの・・・時を止めた」

一旦そこで話を止めたゲンナイ。

「時を止めたって・・・じゃあ、今のワタルさんは・・・」

未来が驚きながら言うと

「不老の身体と言えるのだろうか・・・」

そう告げるワタル。

「ワタルはどうしても・・・仲間達を見つけたかったんだ。何年かかっても・・・」

そう言うツノドラモン。

「でも身体の時が止まるってことは・・・」

「そう・・・トキドラモンの力を受けたその日から、ワタルの身体は成長していない・・・もちろんそうなってしまえば現実世界に帰ることも出来ないだろう。だからワタルはこの世界に居続ける道を選んだ」

そう話していくゲンナイ。

「家族にも会えないなんて・・・」

そう呟く隼人。

「家族の事を思えば帰らなくてはいけなかった。だがそれ以前に消えた仲間達を見つければ現実世界に帰っても意味がないと思う思いもあった」

「そんなある時、この世界に新たな異変が起きた・・・それが今の七大魔王達の出現だった」

ワタルの語りの後にそう告げるゲンナイ。

「個々がかつての邪悪なデジモンに匹敵する強さを持つ七大魔王・・・この事態に世界を守るデジモン達はすぐに動いた・・・」

「それでどうなったんですか？」

尋ねる隼人。

「四聖獣達やトキドラモンのお陰で、今の状態のように別空間に閉じ込めることに成功した」

そう語るゲンナイ。

「だけど世界が平和になって、落ち着いてからだだったんだ・・・今度はトキドラモンから俺達に接触してきたのは」

そう告げるツノドラモン。

「その時ワタルは私の所にいたから、私も驚いたよ」

「でもなんでトキドラモン何かが来たんや？」

そう聞く瞳。

「かつてワタルと会った時に、ワタルの心の中にある七つの波動と同じものを感じたという事を伝えに来た・・・隼人君たちにはわかるかな？」

とりあえず聞いてみたゲンナイ。

「刹那は何かわかる？」

兄である刹那に聞いてみる未来。

「七つの波動・・・七人の仲間達・・・七大・・・！？」

何かに気づいたのか、表情を固まらせる刹那。

「どないしたん？」

心配そうに顔を覗き込む瞳。

「ワタルも知っているんだな・・・」

静かにそう聞いた刹那。

「ちよつと刹那・・・」

教えてほしいのか刹那の前に立つ未来。

「七大魔王・・・それがワタルの仲間達だったんだよ」

ゲンナイがそう話した瞬間、隼人・未来・瞳の表情が刹那と同じようになっていた。

「人がデジモンになったってこと？」

そう聞くミルモン。

「正式に言うなれば、仲間達の魂が・・・だけどね」

「魂って・・・」

「トキドラモンはワタルの中にある仲間達の思い出に宿る魂の力と、七大魔王の中に眠る魂の力が同じものだ・・・理解した・・・」

すでにゲンナイの話は、隼人達の理解を越えていた。

「じゃあワタルさんの仲間達は・・・」

隼人がそう言うと

「もはや人としての身体はもう無いだろう。七大魔王を倒したとしても仲間達は戻ってこないことを・・・そこで理解した」

そう語るワタル。

「だけど諦めなかったんだよね。この世界に残って旅をしていたんだから」

そう言ったチクモン。

「ワタルが導きだした答え・・・身体はダメでも心は取り戻せる・・・と言うものだった。魔王を倒し中にある仲間達の魂を解放させるよね」

「ワタルさん・・・」

「七大魔王達がこっちに集中して狙ってくる理由・・・何となくわかったぜ・・・」

そう告げる刹那。

「俺は七大魔王を倒して仲間達の魂を解放させたい。だが、俺一人ではどうにもならない・・・だがいずれ七大魔王はデジタルワールド征服に動く・・・そして君達が来てくれた」

そう言ったワタル。

「何やとんでもない話になってもうたな・・・どう思っんや？刹那君」

尋ねる瞳。

「魂の解放の事は俺達には関係ないが、この世界を何とかしないと元の世界には戻れない・・・」

「それはわかってるわ」

そう言う未来。

「どちらにしても今の君達じゃまだ魔王一人を相手にするのも無謀だ。まだ時はある・・・その中で成長出来ればいいんだ」

そう告げたゲンナイ。

隼人達がワタル達の話に熱心に聞いていた頃、七大魔王が一人・プロフェモンが大きな動きを見せようとしていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2022g/>

デジモンフューチャー

2010年10月12日03時35分発行